



# T S 調教 施設

~敵国に捕らえられ  
女体化ナノマシンで  
快楽調教されました~

強制女体化  
快楽調教

女の快楽からは逃げられない

文字数50000字以上  
挿絵 7枚

聖華快楽書店



調教施設

女体代

エルトリア

Illustrator

西陽ミツバ 朱兎栗いむ



聖華文庫



## 第一話 女体化ナノマシン

どれくらい、歩かされただろうか。

ただ靴の鳴る無機質な足音だけが、アルフの耳に反響していた。

逃げようにも両手には分厚い手錠が嵌められ、両脇は屈強な兵士の男二人に挟まれていく。何より視界は目隠しによって真っ暗で、結局逃げ場はどこにも無かった。

「止まれ」

「っ……」

強い口調で命じられ、アルフは唇を噛み締めながらも立ち止まる。伸びてきた手によって、目を覆っていた目隠しが外された。急に瞼に差し込んできた光に、思わずアルフは目を細める。

「う……」

程なくして、白んだ視界が戻ってくる。目の前には恰幅が良く、豪華な軍服を着た男が立っていた。階級も相当高いのだろう。

男は拘束されたアルフを舐めるように見回し、ニンマリと笑う。

「これはこれは、まさか本当にかの有名なアルフ様が来て下さるとは。報告が入った時、初めは誤報かと思いましたが……うちの兵士は本当に優秀だ」

「御託は良い。ここはどこだ。本当にアウライ帝国なのか？」

そう目の前の男を睨みつけながらも、アルフは内心では敵国アウライに敗北したことを

酷く屈辱的に思っていた。

大国ロタール連邦の軍に所属するアルフ・エーベルバッハは、今宵も長年戦争をしている敵国アウライ帝国に、出撃していた。

突如として銀髪紫眼のアウライ人による世界侵略が始まり、それに対抗するべく結成されたのが、アルフの属する多民族率いるロタール連邦だった。

少佐を冠するアルフは、今回の侵攻で非常に重要な役割を担っており、ロタール連邦にとっても転機となる作戦

だが今回、軍も予期せぬ事態によって基地が大規模な襲撃を受け、気付いた時にはアルフは敵の手に落ちていた。

「アルフ様の噂はかねがね聞いていましたぞ。軍に所属してからたった四年で少佐へとの上昇があった、天才だとか。実際、あのロタールの防壁を割るのは本当に苦労しましたからなあ」

「そんなことを私に聞かせてどうなる？ 言わせてもらおうと、私を拷問しても何も有益な情報は得られない。大人しくさっさと殺すことだな」

「まさか、殺すだなんて。そのような勿体ないことをするわけが無いでしょう！」

胡散臭い言葉に眉根を寄せるアルフだったが、男は笑みを深めただけだ。

「不思議そうな顔ですねえ。説明するものなんですし、実際にその目で確認してもらいましょうか。とても有意義な『使い道』をね」

「ぐっ……」

軍服の男が目線で合図をすると、アルフの両隣に立っていた兵士が強引にアルフの肩を掴む。無理やり歩かされ始め、アルフは痛みにも舌打ちをした。

先程の太った男もそうだが、両側を挟む男の白い軍服が光で反射して不愉快だ。ロタールの緑を基調とした服とは違い、眩しくて仕方がない。

（使い道、だと……？ どういう意味だろうか）

牢屋行きになるのか、それとも拷問されるのか。覚悟していたアルフだったが、長い舗装された廊下を歩かされる彼が連れてこられたのは、非常に大きな鉄製の扉を構える部屋だった。天井も一気に高くなり、廊下の広さも格段に上がる。

扉の上には、特別調教施設と記された札が貼られていた。

兵士の一人が扉の右端に設置された電子パネルにカードキーを読み込ませれば、軋んだ音を立てて鉄の扉が開いていく。

（なんだ、この施設は……？ 報告には無い施設だ）

中は大量の機械や培養カプセルが並んだ部屋で、大仰な研究所にアルフはかすかに目を見開く。

様々な技術人が集結するロタールの化学に対し、アウライ帝国は兵器に関して非常に高い技術水準を保持していた。そのため拮抗する戦力から、両国は数世紀にも渡って戦争を続ける事となった。アウライ帝国が水面下で様々な研究を行っていることはアルフも知っていたが、報告には無かった技術を目の当たりにし、驚愕する。

（このカプセルは何に使うつもりだ？ 軍用には見受けられないが……。そもそも、これは兵器なのか？）

脱走した際に出来るだけ本国に有力な情報を持って帰られるよう、アルフは歩きながらも静かに辺りの様子を探る。

(それに調教、とはどういう意味だ。洗脳でもしているのか?)

部屋の奥に歩かされて行く内に、中は水で満たされた沢山の細長い透明な培養カプセルが左右に立ち並び始める。やがて部屋の一番奥に辿り着き、前方を歩く小太りの男も足を止めた。

「着きましたね」

「は……!?!」

アルフも前方に視線を戻したが、目前に拡がった光景に言葉を失う。

大量の円形の水槽のようなものが等間隔に並んでおり、さらに培養カプセル内のいくつかには既に緑色を基調とした軍服を着た人間——ロタールの兵士が液体の中でたゆたっていた。

「なんだこれは……!」

「クク……説明せずとも、すぐにこれの効果は実感することになるでしょうね。もちろん、その体をもってしてね」

「冗談ではない!」

アルフはさつと青ざめる。さらに前方の空の培養カプセルのひとつが音を立てて開き、アルフは引きずられるようにしてそこに連れていかれる。

「っや、やめろ! 離せっ!」

そんな得体の知れない物の中に、入れられる訳には行かない。暴れるアルフだが、すぐ

に屈強な男に両側をがっちり抑えられる。全力で足掻くも培養カプセルの中の拘束具に四肢を固定され、やがて重い音を立てて透明な扉は閉まってしまふ。

「くそっ、開けないか！私を今すぐここから出せー！！」

アルフは顔を蒼白にしながら、固定具をガタガタと揺さぶって叫んだ。

「当国が誇る技術の結晶である、生体ナノマシンです。稼働が終わったあとが楽しみですなあ」

男は全く取り合わず、湿った笑みを浮かべて口角を吊り上げる。

すぐにアルフの足元からは、ゴポゴポと水が音を立てて溢れ始めた。

「くっ……」

身体が水に沈んでいくと同時に耐え難い眠気が込み上げ、アルフはそのまま意識を失った。

ゴポゴポとナノマシンを含む水が抜かれていくと同時に、カプセルの扉が開く音でアルフは目を覚ました。

「ん……」

ぼんやりとした思考で、アルフは閉じていた目を開く。

身体を拘束していた固定具が外れ、アルフはふらふらと開いたカプセルの扉を跨いで外に出た。

外の新鮮な空気が心地よく、ひとつ深呼吸をする。

気分はそこまで悪くないものの、何故か酷い違和感が拭えない。大切なものを取りこぼしてしまったような、悪寒が酷かった。

「なんだ……？」

朦朧とした頭を上げたところで、急に隣から悲痛な女性の悲鳴が聞こえた。

「どうなってるんだよこれ！」

「……！？」

弾かれたように声の方を振り返れば、全裸の若い少女がわなわなと震えて叫んでいた。なだらかな銀髪に紫色の宝石のような瞳。紛れもなく、アウライ人だ。

（何故、ここにアウライ人がいる？）

その横を見れば他にも若いアウライ人の少女らが複数人、全裸でへたり込んでいた。その光景に、アルフは培養カプセルに入れられる前の記憶を思い出す。

培養カプセルは全て開いており、たゆたっていたはずのロタールの男性らは一人も居ない。

「まさか……！」

ハッとアルフは確信する。慌ててもたついた足取りで、自分の出てきたカプセルに駆け寄った。

「これが……わ、私の身体なのか……！？」

ガラス製のカプセルに手をつけて覗き込むと、十四歳ほどの年若いアウライ人としか言えない容貌をした女性が映り込む。

自分が片手をあげれば、鏡の中のアウライ人も片手を上げる。

「ど……どういふ事だ……」

鍛え抜かれた胸板があったはずの胸部に触れれば、小さいとはいえ女性の胸の感触が返ってくる。

シヨックのあまりその場に座り込みそうになるアルフだが、彼の誇りとプライドが許さなかった。

呆然とした空気が広がる中で、場を間断するように悪趣味な笑いが聞こえてくる。

「どうやら全員、上手くいったようですねえ。どれもこれも、見事な雌になったようでした。良かったです」

知らぬ間に目の前に立っていた例の軍服男は、全員の顔を見回しながら拍手する。座り込んでいたアウライ人達も皆弾かれたように立ち上がり、口々に男を痛罵した。

「お前は……！」

「ふざけるな、一体なんなんだよこれ！！」

「なんで俺たち、女になってるんだ！」

だが男は何処吹く風と言った様子で肩を竦める。

「ふざけるなも何も、これが我々の技術です。生意気で誇りだけは無駄に高いロタールの人間を、決して我々に逆らえない雌へと調教する。それが『ロタール女体化計画』だ」

想像以上に悪趣味な施設に、アルフは絶句させられる。ナノマシンだけでなく男をアウライ人にするというその技術は、国内はおろか全世界中を出し抜くほどの技術力だ。

いかに彼らが本気でこの計画に力を入れているか否応にも理解し、アルフは背筋が寒くなるのを感じた。

「大尉」

パンパン、と男が手を叩いた途端、どこからともなく見たことの無い男が現れる。中年で中佐の男とは違い、突然現れた白軍服を纏った男はまだ若く二十代前半にも見えた。

「はっ。ただ今参りました」

「ええ。これらが貴方の新しく担当する『雌』ですよ。たつぷりと仕込んであげて下さいねえ」

「誰が雌だ！」

いくら女性にされてしまったとはいえ、雌と言われてアルフは顔を真っ赤にして噛み付く。

「この『雌』は優秀だが特に反抗的です。貴方にもぴったりだと思ひましてね。しっかりと教育してくださいねえ」

「なるほど……承知しました」

中佐はねっとりとした視線をアルフに向け、笑みを浮かべて足音を立てながらあっさりと去っていった。

その場には白軍服の男と、戸惑いを隠せないアルフらだけが残される。

(一人なら……いや、今逃げるのは無理そうだな)

一瞬、脱走の二文字がアルフの脳をかすめるが、直ぐに首を振る。

大尉と呼ばれた男は、身長も高く鍛え抜かれた体格をしていた。少女にされてしまった今、不意を突かなければまず筋力差では勝てないだろう。

(それにまだ、この施設の間取りを理解していないしな)

反抗的な態度を見せれば、拘束を強められる可能性もある。じっくりと計画を練らなければとアルフは思案した。実際この場の少女達も、ここで男に抗ったとして適わないと自覚しているのだろう。誰もが剣呑な視線で、大尉と呼ばれた男を睥睨する。

男は腕を組みながら、アルフらを見回した。

「見てのとおり、このナノマシンを注入されればどんな男もアウライ人の雌になる。凄いだろう？ アウライ帝国の化学の集大成だ。もつともその効果は、貴様らの体でよく実感してるみたいだがなあ？」

「こんなことを認められるわけがないだろう！ 早く私たちを元の体に戻さないか！」  
アルフの抗する言葉も、男は鼻で笑って一蹴する。

「元の姿に戻すだと？ 捕虜の分際で楯突くとは良い度胸だな。自分の立場がわかってい  
るのか？」

「くっ……」

「俺の言うことを大人しく聞いていれば、お前らの安全は保証してやる。まあ、お前らはこれから逃げようにも逃げられなくなるからな。——このナノマシンで女体化した人間はなあ、食事ではなく精液でしか栄養を摂取出来なくなっていくんだよ」

「は……！？」

「何だって……？」

それまでがなっていた少女たちが、一斉に黙り込む。愕然とした空気が広がった。

「ナノマシンで性転換したお前らもこれから、ザーメンで食事を摂るようになるんだ。それ以外は開発される毎に、段々身体が何も受け付けなくなっていくんだ」

(な、何の冗談だ……！)

言葉の意味を理解し、アルフはゾツと肝を冷やした。

何より元は同じ男ということもあり、想像するだけで背筋が凍りつく。

アウライ帝国もロタール連邦も深刻な女性、ひいては人手不足ではあったが、まさか裏で人権の無い捕虜に非情な実験をしていたとは。

他の少女らも、顔色を赤くしたり青くしたりと絶句していた。男は大袈裟に腕を組みなおし、わざとらしい仕草でアルフらの顔を交互に見やる。

「お前ら傲慢で反抗的なロタールの奴らをどうすれば従えることが出来るか……上の偉い奴らの出した答えが、お前らの今の姿だよ。無駄に忠誠のお高い貴様らを全員、それも最も有効的に利用し尽くせる方法でな。これから貴様らは漏れなく、アウライ帝国にとって必要な駒として働いていくんだ。素晴らしいだろう？」

全員が何も言えなくなるところで、男はゆったりと言葉を続けた。

「お前らの体には、注入されたナノマシンが今も滞在している。良いか？ お前らはもう、俺たちアウライ帝国の所有物なんだ。抵抗なぞ無意味な考えは持たないことだな。貴様らの命は俺が握っている。お前ら雌は俺たちのため、これから忠実な奴隷に生まれ変わるんだよ」

男から女へと変えられただけでなく、さらに徐々に開発が進む事に精液でしか生きられない体になるという。思った以上に最悪の状況に、アルフは危機感を募らせた。

(雌奴隷だと……冗談ではない！ 何て悍ましい考えを思いつくのか、アウライは……！ 今の話が本当だとしたら、余計なことをされる前に早く脱出しなければ……)

そつと調教師と囚われた仲間らに視線を向け、唇を噛み締める。

(まさか捕虜を、性別を変えて繁殖のために利用していたとは……アウライ人は我々を心のない人間だと言うが、これではどっちが悪魔だか……)

調教師を名乗る男が嘘を着いているとは到底思えない。すなわち脱出が遅れれば遅れるほど、逃げ出す可能性はより低くなっていく。悪辣で非人道的なアウライ帝国の実験に、盛大な嫌悪感を抱いた。

反論出来なくなった少女たちに満足した調教師は、捕らえた囚人情報の登録したパネルを眼前に表示し、淡々と業務をこなし始めた。

「これからは貴様らを番号で呼ぶ。一度しか言わない故、忘れないように。こちらの要求を拒否したり、歯向かった者には厳罰を与える」

調教師は指で宙に浮いたパネルをスライドさせながら、淡々と業務を進めていく。

「お前の番号は084だ」

左から順に少女に向かって指を指し、調教師の男は番号を告げた。

「お前は囚人番号087、お前は088……お前は089だ。忘れるな」

089のところ自分で自分を指さされ、アルフは身体を震わせた。

「っ……」

「なんだ？ 089、言いたいことがあるのか」

「……いえ」

首を振って視線を逸らしたアルフに、調教師は鼻を鳴らす。

「ふん、それなら良いがな」

男が番号を振り終わったところで、顔を隠した兵士が台車でガラガラと何かを運んでくる。

調教師はそれを横目で確認すると、装着していた金の首輪に手を当ててアルフらに命じた。

「『着替えろ』」

「っ!?!」

男がそう言葉を発した途端、アルフの体は彼の支配下を離れてひとりで動き出す。どうしてか勝手に、男に命じられたとおりに台車に置かれていた服を手に取り、着替え始めていた。

(何だ、体が勝手に……っ)

アルフは酷く戸惑う。止めようとしても肉体は自分の意思では動かず、命令には逆らえない。一切口ごたえ出来ずに、ただ用意された衣服に着替えることに身体は集中していた。視線だけ何とか真横へと移せば、座り込んでいたはずの少女達も、立ち上がって男の命令通りにスーツに着替えている。

(あの首輪の仕掛け、捕虜を操ることが出来るのか!?! そこまでアウライ帝国の技術は進歩していたのか……なんとという事だ)

条件はあるのだろうが、捕虜の肉体から自我が離れて命令通りに動かせるという科学力に、アルフは動揺を禁じ得ない。

(不味いな……逃走経路を確保するだけでなく、どうやって命令を阻止できるか。何かからくりはあるはずなんだが)

想像以上に立場の悪い現状と、逃走の難しさに焦りを覚えそうになった。その間も自分の手はひとりでスーツを来ており、やがて装着し終える。

用意されたスーツはラバー製のもので、ぴったりと隙間なく身体に張り付いてきた。あらかじめ肉体を採寸していたというよりは、ロタール人を少女にする際の体付きや身長が一律に定められているのだろう。見ればこの場にいる少女全員が、同じような背丈と体つきだ。

愛玩動物のようだな、とアルフは心の中で吐き捨てる。

「全員着替えたか。番号順に並んで歩け」

少女たちに視線を一巡させて全員が衣服を着衣したのを確認した調教師は、背を向けて歩き始める。少女らもどこか生気の無い様子で、調教師の後に続き始めた。

いきなり少女へと変えられ、説明を聞いてとても正気ではいられなかったのだろう。アルフはぼんやりとした彼女達の表情を見据えながら、硬く脱走することを誓った。

## 第二話 調教スーツ

アルフらが通されたのは、ずらりと左右の壁に扉の並んだ廊下だった。扉の上には番号が表示されており、捕虜一人ごとに部屋が割り当てられているらしい。

「ここがお前たちの部屋だ」

アルフは調教師の様子を密かに伺い、089と表示された部屋へと入る。また部屋の扉の真横には、一つ一つカードキーをかざすような機械が付けられていた。

入るのは自由だが、部屋を出るのにはカードキーが必要らしい。

(厄介だな……)

その後は一人ずつ雑用の兵士から簡単な食事を配られ、自由時間が与えられた。

「随分と温い警備だな」

一時間も用意された休憩時間に、驚きを通り越してアルフはあきれ果てる。それほど、絶対に逃げられないという自信があるのだろうか。

(舐められたものだな……逆にじっくりと有効活用させて貰うか)

部屋にはベッドとテーブル、トイレと最低限必要なもの以外は何も無く、使えそうなものは見受けられなかった。とはいえ時間はたっぷりとある。

どうしてか、部屋にはシャワーもないというのに排水溝が設置されていた。休息を取るためのベッドも置かれているというのに、水周りに関するものが設置されているのはあまりに不自然だ。

「ん……」

そう思ったところで何かアルフを揺らす。

「なんだ……誰だ!？」

不意に全身にぞわっと違和感を感じ、弾かれたようにアルフは立ち上がる。

「は……一体、何が起こって……」

視線を下げれば、ひとりでにスーツが、胸周りと股間を中心に震え始めていた。驚きの表情を浮かべたアルフだったが、次第にその顔が崩れていく。

「くっ、ふ……!!？」

その際にいつも股間にぶら下がっていたものが消滅していること、自分が本当に女性に変えられてしまったのだということを、否応にも知らしめられる。

「っあ……は……何だ、これはっ……!スーツが動いている、のか……!!？」

ぴったりと皮膚に張り付いてきたスーツは、そのまま小刻みに揺れる。

一度も触ったことの無い乳首を振動させられ、くすぐったさが湧き上がる。

「くっ、アウライ人め……悪趣味なものを開発して……!!！」

道理でやたらと長い自由時間を設定されているわけだ、アルフは遅ればせながら理解した。このために、わざわざ一時間もの猶予が与えられていたのだ。決して休憩を取らせるわけではなく、スーツに責められ調教される

スーツが動く毎に直接揺れがダイレクトに伝わってきて、アルフはふらついた。

「くそっ、この……やめろっ、揺らすな、気色悪い! そんな所を弄り回して何になる……!!！」

特に、両乳首を集中的にこね回される。最初の方こそ違和感しかなかったが、なんとも言い難い痺れが腰から生まれ始めた。

「あっ……ふう……これは……」

縮こまっていた乳首をギュッギュッと押され、引っ張りあげて乳輪をくすぐるようになすすと可愛がってくる。しゅるりとスーツに周りを囲われ、紐を引っ掛けるかのように強く巻き付かれて上向きに引っ張られ、アルフは甘く呻いた。

繰り返されていくうちに、刺激される乳首は首をもたげて大きくなりこっぴていく。

さらに生き物のように蠢くスーツがそこを食い締め、堪らずアルフは肩を跳ね上げた。息が上がっていき、ぞわぞわとした刺激が少しずつ大きくなっていった。

(な、何だこの感覚は……こんなの知らないっ……!)

鳥肌が立つほどの刺激だと自覚したアルフは、息を飲んだ。

「これが、女の快感とでも言うのか……?」

男とはまた違い、乳首を擦り立てられる度に疼きのような感覚がせり上がってくる。

堪らず、アルフは唇を固く噛んだ。この部屋も監視されているかもしれない。みっともない真似を見せたくはなかった。

「やめろっ……う、そうだ……このスーツが原因なら……!」

ようやくスーツを脱がしてしまえば良い、という発想に至ったアルフはスーツのチャックに手を伸ばす。だが

「くう、何故だ、何故脱げないんだっ……!! うっ」

スーツを掴んで流動を妨害しようと画策したアルフだったが、女性の力ではすぐに弾か

れてしまう。

薄くも伸縮性に富んだスーツは、自在に動きながら乳首をキュッと握る。

「ひ、ひ、ううっ……!!」

快感を拾ってはいけない、ここで沈めば後は溺れるだけで戻れなくなる。そう痛いほど頭では分かっている。だというのに、ねっとり反則的な手巧で摩擦されれば簡単に、その忍耐も崩れてしまう。

強く膨らんだ乳首と、尖りぷっくりと濃い桃色に色付いたクリトリスを吸い上げられて悶絶する。

「っはあ、あ、あああっ! あああっ……やめっ、声、抑えられないっ……!! うっ、ああ!!」

ズリズルズリズリ、と奥地から浅い所まで隙間も逃がさずに削られてしまうと、腰が浮いて尻が跳ねる。

「うっ、ひ、ひぐっ、やうああっ!」

桃色に色付いた乳首を押しつぶされ、引き伸ばされた後は敏感なそこを絶妙な力加減で、リズム良くトントンと再度押し込まれる。

「うっ、くうう……」

形がくつきりと乳頭を強く挟んだまま、スーツは布地の中でめちやくちやに捏ねる。アールの肩が幾度も跳ね、思考を食い荒らされる。

スーツは股周りと乳首をクリクリとそれぞれ包み込みながら絶妙に動き、激しい性感が理性を溶かしていった。

「くうう、ふうっ……！あっ、はふっ、うう……！！」  
乳首を高速で弾かれて、アルフの身体が仰け反ると同時に、鼻にかかるような甘やかな声が溢れる。

「ひゃううっ、うっ、やああっ……！！」

スーツだというのに濡れた音を立てて、よりきつめに股間にも吸い付いてくる。

お前は雌なのだと言わんばかりに、女としての快感をアルフに刻み込む。

「はっ、こんな……私がつ……！！」

股間と乳首をクリクリとさざめくスーツに擦られ、体から力が抜けていく。またビクンと背筋を痙攣させたアルフは、ついに立つことさえままなくなってしまう。

「ふああ……あっ、ふうう……ただの胸だと言うのに……こんなところで感じるなんて、屈辱だ……！！」

心では悔しいだけのはずだというのに、身体は確実に感じている。

その場にへたり込み、アルフは熱い息を吐き出しながら真っ赤な顔で見悶える。

「屈してたまるか……！！！」

スーツを脱ごうと背中にも手を回しても、指がジツパーの上を虚しく滑るだけだ。どうしてか、自分の力ではジツパーを引き下ろすことが出来なかった。

「んっ、あああっ！そっ、そこばかりい……！！」

その間もねつとりと乳首を責めこまれ、身体から力が抜けてしまう。何か、どうにかして現状を打開する術はないか。緩やかに刺激されていた、股間への激しさが増した。

「く、このっ……」

アルフのそこにはかつてはあったペニスの代わりに、女性の器官であるクリトリスが鎮座していた。スーツはしゅるりとうねったかと思うと、急にクリトリスを痛烈に締め上げてきた。

「ひうっ、ああああっ!?!」

ペニスを擦った時とは全く質の違う、重い快楽が響いてくる。

たまらず叫んでしまったアルフだが、その自分の声の蕩けように驚かされた。

「そこはっ、ああううっ!」

鋭い快熱に、ぴゅふりと秘部から熱い愛液が吹き出した。

「ふああ……! つは、ああ……んっ、ひううっ……!」

全身を締め付けられつつ、クリトリス先端をスーツにすりすりとなぐられ、とても声が抑えられずその熱に没頭してしまう。

「違うっ、こ、こんなの私ではないっ……!!」

自慰をしていた時とは比較にならないほどの、未知の快感にアルフは戸惑う。何とか感じまいと歯を食いしばるが、直ぐにその忍耐も解けていく。

しゅるしゅるしゅるしゅる、と実に無機質なながらも不規則に猥動するスーツにしゃぶられる。

「んううっ!」

明らかに雌として感じるように、心身もろとも調教されている。そのことに気がついた彼は歯噛みする。

「その動きはダメだっ……やめろっ、その動き方は嫌だっ……!!」

優しく先端を撫で摩すり、ゾクゾクと這い昇ってくる快楽の電流が止められない。

初めて味わうクリトリスでの女としての快悦に、アルフは翻弄されるしかなかった。

「何なんだこれはあ……っ！」

アルフの股間から聞こえる衣擦れの音も、やがて粘着質な音が混ざり始めた。股を中心に小さくラバースーツは薄く灰色に湿っていて、カッと心地良さと羞恥で顔を真っ赤にする。

「き、気持ちよくっ……ひうんっ！んっ、ふ……！！！」

波立つスーツに責められている内にじわじわと、股の間の湿りは面積を広げていく。

嫌でも乳首と股間を刺激されて女のように感じていると認知させられ、あまりの羞恥と屈辱に歯の音が震えた。

「くうう……か、感じるものか……ここで落ちたら、奴らの思う壺だ……！そう簡単に流されるか——んはあっ！あっ、くそ……っ！」

優しく擦られたかと思えば、強く締められ揺さぶられる。びっしりと濡れたスーツでは、きつく絞られても快感しか生まれなかった。それどころかより密着してくることで、より喜悅は増してしまふ。

「くうっ、あああ……！！！あ、それはっ……！！！」

両乳首と膣口、クリトリスを波打つスーツに器用に挟み込まれ、背筋を激しく仰け反らせる。グチュグチュといやらしい音を秘部から響かせ、愛液を潤滑剤代わりにしながらスーツは責め込むのを続けた。

「ああっ！あっ……んああっ！んひっ……！」

増えた愛液をスーツが吸収しきれず、それらがトロトロと股とスーツの間から滴り落ちる。だから排水溝が設置されていたのかと、今更アルフは理解した。わかったところで、何かが変わる訳でもない。

「ひううっ!？」

濡れたスーツにクリトリスを強く摘みあげられ、グチュグチュと揺すられる。それは湿り気もあり人間の口内に吸引されているようで、錯乱した。

「んひいっ! ひっ、やめっ……! やああっ……! こっ、擦るなあああ……!」

さらに強くきつくクリトリスを摩すり、隙間にまでぺったりと張り付き振動させてくる。元は伸び縮みに富んだ柔らかいスーツだと言うこともあり、多様な切り口で追い詰められていく。

(こ、こんなの知らないい……!)

クリトリスを計算され尽くされた動きでスーツに絞られ、アルフは太ももを引き攣らせた。ここまで乱されるほど、女性のクリトリスは悦いものなのかとただただ驚かされる。このスーツは急速にクリトリスと乳首を開発し、性感帯へと仕上げていくことに特化している。

鋭すぎる快感に、さらにアルフの股から愛液が滲み出した。

「ひいひいっ……その動きやめろっ、あ、だ、だめだっ……! 止まれっ、もう止まれえっ!」

チカチカと、感じたことの無い快感に視界に星が散る。

激しさこそないが、時間をかけてアルフの肉体と精神に雌としての快楽を刻み込んでい

く。

「んううっ！うっ、ふううっ」

次第に速度も加速し始め、アルフの喘ぎ声がさらに大きくなる。無意識の内に身体は腰を振りたくり、追いかけてしまう。

うねり波打つスーツの蠢きは、人の指とは違って快樂を拾わせることだけを目的とした、完璧な力加減と角度だ。そんな計算され尽くされ、アウライ帝国の並外れた科学力の塊でもあるスーツに、アルフが敵うはずもない。

「はふっ、ふうう……！」

アルフは為す術なく、快樂に悶え喘ぐあえしか無かった。抗わなければという理性を置き去りに、身体は昇り詰めていく。

（来るっ……！あ、上がってきて……っ）

腹の底から、急激に水位を上げて何かが迫る。

男だった時の絶頂とは違う、もっと重く響くようなそれだった。

来ては行けないものだと察し、衝動を懸命に押し込めようとするも、その踏ん張りもまた秘部をスーツに食い締められれば瓦解してしまう。細かくくすぐられ、目を見開いた。

「ああああっ！や、やめえっ……はふっ、ふううっ……！！」

さらにただ蠢くだけではなく、スーツは波打ちを利用して多種多様なやり方で責め入ってくる。

「ひやああっ！擦るなっ、あひっ……！ひいううっ！」

自動的にでこぼこことスーツの内側を波打たせ、さらにその凹凸の生まれたそれでクリト

リスと乳首を摩擦した。

クリュクリュクリュ、とクリトリスを磨くように扱かれて、思わず目を見開いた。

「くううっ！ うあああっ！ あはうっ、んふうううっ！」

まるでブラッシングでもするかのよう、波打つスーツは絶妙にゾリユツ、ゾリユツと自在に動いた。

ただ単に即座に絶頂させるような動きではなく、これが雌の快感だと覚え込ませるようにゆっくりと、彼の精神にクリトリスと乳首での悦を刷り込んで行く。

流されてはダメだとは頭では思いつつも、慣れず耐性のないその快感にアルフはどうしようもなかった。

「あああっ……！！んっ、うう……！！！」

思わず理性もかなぐり捨てて浸りそうになり、慌ててアルフは首を振った。そこでスーツは、クリトリスだけでなく愛液で濡れそぼった秘部にも魔の手を伸ばす。

「ひううっ！！！」

小さく内側にスーツがへこんだかと思えば、それが愛液でドロドロのアルフの割れ目になぞる。

「ひやう……っ！ あ、だめ、だめ……ん、やうう……っ！？」

ちゅくり、と卑猥な水音が鳴る。秘所を伝った快悦の電流と熱い感覚に、アルフは甲高い声で悶えた。

「っあああ！ や、だめ……ひんんっ！ どこを舐めてっ、や、そんなところ……はうううっ！ ふああっ、あっ」

愛液を吸って湿ったスーツがジュブジュブと蠢くのは、ねつとりと膣口を舐められているようで、アルフは首を振って身悶える。

「ふあああ……！ やひっ、やめっ……！ だめだ、あっ……！ ひ、はひやうううっ！」

速度を増すスーツに、アルフは高い声を上げて盛大によがる。

「んううううっ！ はふっ、うううう……！ ひやめっ、もう離してっ、ひやああああ……！ ふあっ、ああんっ……！！！」

ピンピンピン、とクリトリスを弾きながら、割れ目から滲む先走りを一滴も残さずスーツは吸い上げる。

「く、そ……ひやめっ、もうやめ、あっ、ふあああっ！！！」

淫猥な音が響き、愛液が押し出されるようにして滲み出す。

濃密な溝をなぞるように舐め上げ、丁寧に吸い付いていく。

「ああああ……！ ひいん……！ ひうう、あ……この私がこんな声をつ……！」

スーツはクリトリスを押し込み、弾いてまたねつとりと沿うように舐め上げ虐め尽くす。まるで人間の舌で舐めるのを意識したかのような、動きだった。

「はひやううっ、や、ひゃんっ……！？ やっ、離せっ……！ おかしっ、おかひくなる……ひやうう……！」

アルフに出来ることと言えば、いやいやと子供ののように髪を揺らして首を振るだけだ。

なだれ込んでくる快感にただ翻弄され、両腿を痙攣させて喘ぎ震える。往復するスーツの舌がびったりと舐めする毎に、ひっきりなしに嬌声が漏れ出た。

「はっ、はひゅ……っ」

ずっと舐め上げられている内に、どうしてか触れられていない腔内の奥がキュンキュンと疼いてうねり出す。

「あああっ、んはああ……!!」

ゾワゾワと猛烈な快感が堆積し、急速にアルフに絶頂が近づいてくる。

「ひぐっ、やうあああああ……!!」

痺れるような快感に、アルフは腹部を痙攣させた。

(こっ、こんな……気持ちが良いものなのか……?)

初めてとはいえ、あまりに猛烈に脳を震わせるような快感にアルフは呆然とさせられる。スーツごときに好き勝手に開発されて翻弄され、よがらされているという悔しさはある。だがその考えをも、深過ぎる快感は溶かしていく。

「あっ、ふうう……そんなっ、気持ちよくない……!! なったら、いけないというのに……!!」

時間を掛けてこれが女の快感なのだ、スーツは強制的に手取り足取り享受<sup>きょうじゆ</sup>してくる。挿入こそされないものの、蕩けきった秘部を淫猥<sup>いんわい</sup>な音を立ててマッサージされる。浅瀬を幾度も往復され、女としての熱に目覚めていく。

「ひあっ、んんう……っ!!」

ぐるりと股間周りを余すことなく、揉みしだいた。

乳首も乳輪も締め上げ、ぷっくりと形の丸わかりになった乳<sup>にゆうしん</sup>芯を触れる布地で扱く。生き物のようでいて、人間には決して出来ない手技だった。

「いっ、いい加減にしろ……!! もうやめろっ!!」

男としての快楽ならば、まだ我慢できた。だが雌としての快感など一切知らないアルフは、当然その熱にも慣れていない。耐性の無いアルフは、ただ喘ぐしかなかった。流される訳にも行かない。

そう精神を保とうにも、すぐに察知したらしいスーツが

スーツはアルフの感じるやり方と強さを瞬時に学習していき、巧妙に彼女を責め立てる。すぐには達しないように調節しつつ、じつくりとアルフの体を調教し、精神を煮込んでいく。

「あううっ！」

特にクリトリスへの責め苦は壮絶で、人間の口内に覆われているかのようだ。

昂っていた身体が、追い打ちを掛けられる。己の理性的な部分では嫌だと思いつつも、とても快感の奔流を抑えることは出来ない。

「ふあっ、あああああっ！くそっ、やめろおっ！」

乳首とクリトリスを揉まれながら転がされ、強く摩すられる。押し込んだり引き伸ばしたり、人に着られる為のスーツとは思えないほどの伸縮性と器用さを持って着実にアルフのクリトリスに責め入った。

また強く吸い上げられたかと思えば、ねっとり表面を優しく撫でられる。

「はあうう……うっ、ああんっ……！！！」

開いた唇から、甘い声を上げてしまう。陰唇いんしんから陰核いんかく、果てには後孔こうこうまで股間全体を吸いつかれながら、乳首も余すことなく揉み上げられる。

気付けばアルフは四つん這いになりながら、胸と尻を突き出した状態で腰を激しく振っ

てしまっていた。プライドも理性も手放して、スーツから与えられる悦に熱中する。

「いきつ、いきたくないっ……！！！」

スーツもその期待に答えるべく、激烈に感じるところを擦り刺激していった。

両乳首を揉み潰して腔内を舐め上げ、摘んだクリトリスをヌヂュヌヂュと磨く。

思わず後ろ向きに倒れそうになったアルフだったが、引き絞られたスーツがそれを食い止めてしまう。背筋をのけぞらせて天井を向いたまま、ビクビクと震え慄いた。

「あつ、はあああ……！！！だめだ、イクつ、来るっ……ひんっ！いきつ、いきたくないのにつ……！！ひ、んふあああッ！あ、来るっ……！！！」

三点への同時の責め上げには、アルフも耐えられない。

水位が瀬戸際まで達した時、限界を迎えたアルフの肉体は激しい絶頂を迎えていた。

「んやああああああつ！」

自慰などとは比較にもならない、強烈な快樂の熱波が脳天を貫く。

「あつ……は、は、ふああ……」

果てた快樂に思考を一時的に飲み込まれたアルフは、恍惚とした顔を浮かべてしまう。

トロトロ……と大量の愛液が、アルフの股座またぐらから溢れた。いやらしく糸を引きながら、床へと落ちていく。



「あ……？」

痛みこそなかったが、絶頂の余韻に浸るアルフの脳にじわじわと何かが染み込んでいく。  
「ふぁ、あ……あ、何、だ……」

その侵食が何なのかは分からず終いで、心身ともに限界だったアルフはぐったりとベッドに沈み目を閉じていた。

### 第三話 操られる肉体

「飛んだ誤算だ……」

アルフは大いに追い詰められていた。

(まさかこのスーツに、卑劣な仕掛けがあったとは……)

アルフはびたりと張り付くスーツを、忌々しげに見下ろす。

どういう理屈で動いているかまでは解明出来ない。しかしこのスーツにめんはじ面恥をかかせられただけでなく、あれから気を失うように眠ってしまった、結局それによって脱走の計画を立てることは出来なかった。

(道理で一時間も休憩が用意されているわけだ……)

休憩なんて生ぬるいものでは無い、性器開発と捕虜に余計な体力を与えないことも目的としているのだろう。男性を少女にして調教師だけでなくスーツでも肉体を改造するといふ、抜け目ないアウライ帝国の計画には反吐が出る。

(く……い……あんな思いも経験も、もう二度としたくはないな……あの人としての尊厳もプライドも破壊するような真似は……!)

先ほどのことを思い出すだけで、震えが止まらなくなりそうになる。怯えるなど兵士として有るまじきことだったが、単純な拷問よりもあれはずっと恐ろしいものだった。体を作り変えられていくどころか、心もそれに引きずられていく恐怖。痛みよりも、ずっとアルフを不安にさせた。

眠りから目覚めたアルフは一応は脱走手段を画策してはいたのだが、有効的な方法を見出せずにいた。

あれから様々な目的で幾度か調教師や兵士に部屋から出され、その際に建物の構図を覚えるように場所を確認したものの、どこも警備は硬く、逃走の経路に使われそうなところは特に武装した見回りをしているのが確認出来た。

自室の扉だけでなく、別の建物と繋がる扉や、外へ出られるドアを開けるには必ずカードキーが必要で、逃亡の手段も潰されている。

注入されたナノマシンは今は脳に存在しており、やがて浸蝕が進むごとに全身に巡るのだという。そうして最後には、身も心もアウライ帝国に染まる……吐き気を催すほどの事態だというのに、胸が暖かくなるような衝動が込み上げてくる。アルフはゾツとして頭を抱えた。

「違う！ 違う……アウライ帝国は敵だ！」

しかし脳の抵抗が薄れ始めて来ていることを、アルフは実感していた。これが浸蝕なのだろう。

これ以上、狂う前に、何としてでも逃げ延びる必要がある。

(どうする……)

カードキーさえあれば脱出の糸口は見えるだろう。しかし武装した兵士からどうやって奪えば良いのか。

「出る。身体測定の間だ」

「っ……」

急に扉が開き、ずかずかと踏み入ってきた調教師にアルフは飛び上がりそうになった。「分かり、ました……」

ゆらゆらと立ち上がり、調教師の後に続く。部屋の外には既に何人かのアウライ人の少女が待機していた。アルフが調教師の担当する少女の最後だったらしく、そのまま来い、という言葉と共にあるきはじめる。

ふとアルフは、目の前を歩く調教師をじっと見つめる。

(この男、銃は持っていないな……)

初めこそ調教師は拳銃を保持していたが、今は特に武器の類は保持していないように見受けられた。

調教師という立場もあり、武装を義務付けられていないのかもしれない。

ちようにど調教師は真横の囚人の少女に何かを命じており、背後もがら空きでこちらに意識を向ける様子も無かった。

(ここだ、今しかない……!)

好機だと理解したアルフは、その機会を見逃さない。

少女になったとはいえ、訓練学校で鍛えられた格闘センスは抜けきっていない。

足を持ち上げ、全身の力を込めて首筋目掛けて振り下ろした。

「は……!?!」

だが蹴りが首筋に直撃する寸前で、瞬時に囚人の方を向いたままの男の手がアルフの足首を掴む。

「どうということだ？ 089。この足はなんだ、答えろ」



男の唇に自分の唇を重ねれば、アルフの口内に調教師の舌が差し込まれ、中を暴くように蹂躪される。

「んむっ、む……んちゅっ……」

（あの命令か！…なんてことをさせるんだ、くたばれクス野郎がっ……！！！）

アルフの身体も男の口の中に、舌を埋め込んでいた。歯列をなぞりながら口腔を舌先で舐り、熱い吐息を流し込んでしまう。勝手に動く舌から伝達される生暖かい感触に、アルフの肌は鳥肌立った。

「んんっ、む、んん……っ！」

（うっ……気持ち悪い……男とキスをするなんて……！）

ディープ過ぎるキスに上手く息を吸えずに酸欠になりかけるアルフに、調教師は巧みに舌先の力を弛めて息を吸わせる。だが呼吸を取り戻した途端にまた舌を突き入れてきた。逆らえないのを良いことにアルフの唇を貪り尽くし、濃密なキスを味合わせていく。抗いたいのに抗えない。支配されているのだと、調教師はアルフにその無力さを実践をもって分からせる。

「んっ、ちゅっ……ちゅくくっ……」

再び呼吸を奪うような深く熱烈なキスに、アルフは身悶えする。舌先を触れ合わせ、音を立てて幾度も口内を吸い上げる。唾液を絡めて蹂躪し、さらにアルフの口腔の奥まで犯し尽くした。

「んうう……はふっ、ちゅるるっ……」

（うぐっ……！！）

さらには調教師から唇と舌を伝って唾液の塊を送り込まれ、アルフは悪寒で粟立った。明らかに嫌がらせだ。

(吐き出せっ、こんなおぞましいもの！くうっ、身体が言うことを聞かない……!!)

アルフが命令に逆らえないことを理解して、彼女が最も苦しむ方法に打って出ている。事実、アルフはその唾液の塊を歓喜するかの如く飲み干していた。

それを舌先で確認した調教師も、目を笑みの形に吊り上げる。

舌が痺れてしまうほどに唇を重ね合わせたところで、ようやくと唾液の糸を引きながら調教師の口が離れた。

それと同時に命令も解除されたらしく、アルフは顔を顰めて口元をガシガシと拭う。

「けほっ、げほっ！死ねっ、ゴミクズがっ……！」

激しい嫌悪感と吐き気を催しながら、アルフは調教師を罵倒する。怒りと憎悪の滲んだ瞳で睨みつければ、その態度はより調教師の激情を駆り立てたらしい。

「ふん、この状況でもまだ逆らうのか」

「ぐ……当たり前だろう！誰が好き好んでこんな下劣なことをするか！」

それでも折れない気丈なアルフの態度に、調教師は征服欲と嗜虐心が刺激されるのを感じた。

「なるほどなあ。お前のことはよく分かった」

逃げようとするアルフの腰を左手でがっちり固定しながら、振り返った調教師は背後で困惑する少女たちに右手を振った。

「もういい、解散しろ。各自部屋へと戻れ」

「は、はい！」

「了解です！」

そう調教師が命じれば、他の囚人達は巻き込まれまいと慌てて逃げるように自室へと踵を返す。全員の姿が見えなくなったところで、またアルフに視線を戻した調教師は黒い笑みを浮かべた。

「さてと……来い」

「つつ……！」

調教師に腕を引っ張られ、アルフは近い部屋へと連行される。

てつきり怒り狂うものかと思ったが、激怒するどころか何故か笑い始める調教師に、アルフは余計に嫌な予感を感じた。

「お前ほど聞き分けのない奴は初めてだ。けどそれでこそ屈服させ甲斐があるってものだなあ」

「黙れ！ 気色の悪いことしやがって……許さないからな」

「馬鹿な奴だな。——命令だ。『両腕を頭の後ろで組んでそのベッドで寝転べ。その状態で、俺に向けて両足を開け』」

「っ貴様！！ あっ、うう……！！」

調教師の命令にカッとしたアルフだったが、身体は命令通りに動いていた。言われた通りに両腕を頭の後ろで組みながらベッドに横たわり、さらには自ら両足を大きく開脚する。精神は明け渡していないというのに、調教師に肉体の服従を誓う恥ずかしい格好に、アルフはプライドを傷つけられる。

「良い眺めじゃねえか。いつもこれくらい従順なら可愛いんだがなあ」

「く、見るな……！」

「さて、特別調教の時間だ。誰が上か、物分りの悪い生意気な雌にしっかりと分からせてやらないとな。089」

舌なめずりをした男は、楽しそうにあえて時間をかけて服を暴いていった。

アルフでは下ろせなかったジツパーを、調教師は難なく下まで引き下ろす。すると、小ぶりな胸がこぼれ落ちた。ニンマリと微笑んだ調教師は、乱暴な手つきと反してその胸を優しく一撫でする。

「うっ……！」

「休憩時間にこのスーツに、調教してもらったんだろ？ 知っての通り、こいつはただのスーツじゃねえからなあ……」

あの時の辱めを思い出し、アルフの顔が赤く染まる。

「その様子だと、すっかり自分の立場を教えられたようだな」

どうしてか、身体の自由は全く効かない。

いくら殴り飛ばそうとしても、腕も足も一ミリたりとも動かなかった。調教師が付けている首輪が原因なのは、明瞭だ。

原因は理解しつつも、どうにも自分の体だと言うのに動かないことが口惜しい。

(この身体が、女になってさえ居なければ……！)

男だった時の筋力と力があれば、こんな男など一撃で首を跳ね飛ばせるといふのにと悔しがる。

「くうっ、ああっ……！！！」

調教師の指が、アルフの桜色の乳首を摘む。何度か指と指の間ですり潰すように捏ねれば、小さな乳首は少しずつ膨らみ始めた。

「うあ、それっ……」

「こっちは正直みたいだなあ」

スーツにより乳首での刺激でも達したことを体は覚えており、そこを性感帯として認識していた。

甘い吐息が漏れてしまい、素直に感じる己の体を呪った。

前日にスーツに雌の悦楽を覚えさせられていたこともあり、身体はすんなりと快感を拾い始めてしまう。

「どうした？ 声が上がってるぞ」

「だ、黙れえっ……！！！」

唯一、自由な声で抗うアルフだが、その声音には甘やかな色が混じっている。調教師はニヤニヤと笑みを深めて、空いた片手でアルフの腹を撫でた。大きく無骨な手のひらがさらに下がっていき、股の間へと到着する。

「んんっ！」

意図的に指がクリトリスを掠め、アルフは喉を震わせた。

「くっ、ふっ……！！ううっ！」

ぬるぬるともう濡れかけている膣口を、ねっとり指で辿られる。

「んんっ！」

直に指を二本挿入され、アルフは思わず肩を揺らした。

「どうした？ そんな耐えるような素振りを見せて。気持ち良いんだろうが、ほら。結局は俺には敵わないんだろう？ ほら、雌らしく声を出してみろよ。我慢しなくてもいいんだ。これは命令では無いからな」

ついこの間、女にされたばかりだと言うのに、男である心を押し退け、スーツでの調教を皮切りに着実に雌の快楽はアルフの肉体に定着していた。

(……はあっ、またこの感覚っ……！ くそっ、流されてたまるものか……！ 私には男だ……！)

調教師の指も単なる抜き差しではなく、ねっとりたくまでアルフに快感を拾わせる律動でいやらしく責め立ててくる。膣内の勝手を知り尽くした動きだった。

(うっ、こ、こいつっ……)

男の指が入ってくるのはこれが初めてだというのに、縮しながら根元まで指を受け入れってしまう。すぐに膣内は熱くなり始め、アルフの意思と反して濡れていった。

「ふーっ、ふーっ……」

味わったことの無い甘い電流が、体の芯から響いてくる。快楽がさざ波となって押し寄せてきて、喘ぎかけたアルフは慌てて唇を閉ざした。

「んっ……はっ、ふっ……！」

「嬉しそうに締め付けてきやがる。それにもう濡れてきたぞ。こんなに濡らして期待しているのか。いやらしい雌だな、お前は」

「うっ、うるさい……黙れ、そんなことある訳が無いだろうっ……！」

「どの口が言うんだか。そんな雌顔晒して言われても説得力ねえよ」

「くううっ！ふ、むうう……！！！」

ジュプツ、ジュプツとわざと音を立てて膣内をピストンされ、咄嗟に唇を噛んでいなければ感じ入った声を上げてしまいそうだった。

（耐えろ、耐えろっ……憎いアウライ人に隙を見せるくらいならば、死んだ方がマシだ……！！）

スーツにまさぐられた時も耐え難い快感だったが、人間の手となるとその質は全く違うものだった。何より調教師もその名の通り、調教に関して人並外れた手技を有している。決して乱暴に動いて痛みを与えてくることはせず、くるくると一纏めにした二本の指で秘部を撫で摩りながら、浅瀬をなぞる。

「くふううっ！」

「ほら、もうぐちゃぐちゃ音が鳴り始めた。最初から俺にこうされたくて反抗したのか？」

「んっ、は……そんな戯言っ……」

「お前はメスなんだ、メスじゃなきゃここで感じるか？心の底から拒んでるなら、善がり狂わねえだろうか？そんな虚勢を張っても意味ねえよ」

「ちがつ、違うっ……！！！」

それでもアルフは負けじと耐え忍び、調教師を罵倒する。

「この変態野郎がつ……逆らえないようにした相手にしか、偉ぶることしか出来ないのか？随分と悪趣味なことだな……！！」

「チッ……黙れ、奴隷が俺に楯突くな。殴られたいのか？」

責める指を止めぬまま、調教師は額に青筋を立てる。

「笑わせるな、こんな捕虜一人好きに出来ないとは軟弱な奴だな」

「——命令だ。『俺を全肯定しろ。気持ち良い時は隠さずにしっかり喘げ。我慢は禁止だ。』  
良いな？」

「は…!?!? つあああつ!?!?」

煽るような笑みを浮かべたアルフだったが、舌打ち交じりの調教師の声に表情を一変させた。

心臓がドクリと波打ち、急速に肉体が変化を遂げていく。

「声がつ、あくつ! んああつ、ふああああつ!?!?」

命令が効いていることを確認するように、調教師はグチュグチュと太く長い三本目の指を突き立てる。

「ひうううつ!! やあつ……あふあああつ!!」

愛液を巻き込みながら、腔内の襞を余すことなく愛撫する。途端に先程歯を食いしばっていたことが嘘のように、アルフは耐えることはせずに甲高い声で嬌声を上げた。

「素直になつたじゃねえか」

「んっ、やうううつ……!!」

嗜虐的に笑った調教師は、弱い所を指で擦る。

親指でクリトリスに優しく爪を立てられるだけで、先程まで喉奥に押し込んでいた喘ぎ声が強制的に引きずり出された。

「あっ、はっ……はひううつ!」

「だらしねえ顔しやがって、もっとして欲しいんだろ？ ん？」

「やめ——もっ、もっとください……」

やめろと叫ぼうとしたアルフだったが、自分の意思とは全く違う言葉がひとりで出て歯の音を震わせる。

（……め、命令か……！）

全肯定という男の命令が、自分の言葉に直接作用しているのだ。心では不本意とはいえ肯定するアルフに、調教師も満足したように耳元で囁く。

「ほう。結局はお前も抗えないんだなあ。とんだ淫らな雌だ」

「ひ、あ……そ、そうです……ん、気持ち良いです……っ！」

（くそっ、くそっ、くそおっ……卑怯者が……！）

自分の口から言いたくもない言葉を強制的に引きずり出され、アルフは憎悪に駆られる。

「可愛い声で喘ぐようになったな。」

「気持ち良くて、腰が止まらないです……ひゃうっ！」

肉体が悦くなってしまうているのは事実で、顔を真っ赤にして悔しがる。

「それなら聞いてやらないことはないなあ。こうやって浅瀬を指でグリグリされんのも好きなんだろ？ ん？」

「あはああっ！ 好きですっ、グリグリ好きですっ！」

（やめっ、やめろお……！ 触るなっ、）

人並み外れた男の手技に、凄まじい快悦で浮き上がった腰がビクビクと跳ねる。

「反省する気になったか？ 淫らな雌だと自覚したか」

（くそっ、下衆があ……！今すぐに死ぬ……っ！）

矜持を徹底的に痛めつけ、侮辱する内容にアルフは男を激情で滾らせた瞳で睥睨した。

「好きっ、好きです」

だが死ぬと紡いだはずの唇は、命令によって勝手に愛の言葉へとすり変わる。

（くううう……！）

殺したいほど憎い相手に不本意とはいえ好きだと言わされ、怒りのあまり腸が煮えくり返りそうだった。

親指でクリトリスを潰され、さらには上下左右に動かして捏ね回す。スーツとは比較対象にすらならない、巧みすぎる男の指先に善がらされる。

「いい反応だ、特にここがイイんだろ？」

「ひんっ！？」

バラバラと挿入した指を腔内で攪乱されて、背中を反り返らせた。

「はいっ！ひゃひいいっ！すきっ、好きですっ！ひぐうっ！気持ちいいですッッ！

ふあああっ！」

グニグニとクリトリスを円を描くように揉まれて、舌を突き出す。

（声が止められない……！ここまで屈辱を感じたのは、初めてだ……！！）

こんな男に感じる姿を見せたくはないと思うも、刷り込みを受けた肉体は男が喜ぶ反応を見せる。矯正された言葉を吐き出した。

「ひゃあああっ！そこっ、そこ擦るの、ひゃううんっ！き、気持ちよすぎて壊れちゃいます……っ！」

「良いぜ、好きだけ初めでこれだけ感じるとは雌の才能があったんだなあ」

あえてアルフのプライドを傷付けながら、指で濡れた膣内を掻き回す。また指は増やされており、実に四本もの指が我が物顔でアルフの秘部を暴き立てていた。

「んっ、く、ふうう……っ！」

ジュポツ、ジュポツと大きくなった水音が耳元で響いて

このままでは本当に雌にされてしまう。雌に作り替えられる。

（それは何としても阻止しなければ……！）

だが腹奥のざらついたところを指で撫でられ、アルフはひっと顔色を変える。

「わかりやすい反応しやがって。隠しても無駄だぜ？ ココがイイんだろう。あえて避けてやってたんだよ」

「ひうううっ！ あああっ！ んはあああっっ！」

このままイカされるのかと思ったところで、ようやく愛液だらけの調教師の指が抜かれていく。

「はーっ、はーっ……」

「こんなものか」

「んっ、くうう……」

やっとアルフは解放されながらも、中々快感の余波が引かず寝台の上でビクビクと身体を跳ね上げていた。かすかに開いた膣口からも、愛液が溢れているのが丸見えだ。絶頂こそ出来なかったが、男の前で指で無様にイカされるよりはずっと良かった。

「悪くない眺めだぜ」

そんな彼女を見下ろし、調教師は気を良くする。

「そんなお前にご褒美だ、マリオネッターの応用を教えてやるよ」

「んっ、はふ……何を……」

痙攣するアルフの痴態をたっぷりと眺めながら、調教師は嘲笑う。

「マリオネッターはな、よっぽど現実離れした事じゃなければなんでも可能にしてくれる優れものなんだぜ？ 手本を見せてやるよ——『お前の脇はクリトリスと同じくらい感じる』」

「っ!？」

調教師がその言葉を呟いた途端ゾクゾク、と身体に形容しがたい電流が走る。特に脇を中心に痺れのようなものが訪れた。

「はっ……？ え……」

あっけにと取られたアルフだったが、伸びてきた調教師の手が彼女の腕を掴んだ。その腕を持ち上げ、毛の無いアルフの脇筋をさらけ出す。

「何をしてるんで、す……くひいッ……!？」

笑いながら調教師は、脇下に顔を近づける。

「ひんっ、あああああっ!!」

調教師の舌がそこを這った刹那、アルフの脇を閃光が轟いた。脳天を直撃した途方もない快感に、嬌声がほとばしる。

「あ、ああっ……!？ はひっ、うううっ!!」

一舐めされただけだというのにその快感たるや、体の震えが止まらないほどだ。大量の

蜜液が膣口から滴り落ち、何もされていないというのにきゅっと膣内が締まる。

「気持ちよすぎますっ……！！！」

たかが脇だというのに、恐ろしいほどの気持ちよさにアルフは身を振った。それこそ、まるでクリトリスと脇がそのまま直結してしまったような感度だった。

「そうだろう？ んぢゅっ、たまらないだろう」

「やめっ、ひ……すごっ、凄いですっ！ おかしくなりますっ……！！！」

実際は身体に染み込んだナノマシンが、脳にそう命令を送って認識させているだけだ。だがその絶対的効果によって、たまらなくアルフは感じていた。

「良い声だな、もっと聞かせろよ」

「んあああっ！ あふうっ、うううっ！」

「変態野郎と言ったな、脇で感じまくるお前は変態じゃねえのか？ どうなんだ」  
調教師に笑われて、アルフは齒噛みする。



(悪趣味が……！……！)

調教師の力の込められた舌の先端は、ビクビクと弱い振動を伝えながら、軽く触れたりちゅぶ、と突ついたりを繰り返す。

「んむ、んん……」

単に舐めるだけでなく、なだらかに窪んだ脇をじゅうううつと唾液を交えて吸い付いた。「ひゃっ、んううう……っ！」

あまりに強すぎる快樂に、アルフはプライドも投げうち泣き喘ぐ。頭の中で光がスパークし、何も考えられないほどの業火がアルフの精神を焼き焦がした。

だが、そんなアルフを嘲笑うように、調教師はゆっくりと汗ばんだアルフの脇を舐め回す。神経の塊の集中するようなそこへと、舌を分け入らせた。

「これはっ、っ……ひゃひんんっ！ひあっ、やひいいいっ……！」

腰が小刻みに揺れ、触れられてもいないむき出しの股間から多量の愛液が滲み出る。感じてるのは明らかだった。

それにしても許容量を超えるほどの悅樂に、アルフは動転する。

(せっ、せめて声っ、声だけはっ……！……！)

声だけは聞かせまいと首を振って抗うも、命令を遂行する肉体は率直な喘ぎを調教師に聞かせてしまう。閉じられない口から嬌声を零した。

「じゅるるっ、じゅちゅっ……良い顔になってきたじゃねえか」

「ひやあああ……ッ！あひ、んはあああっ……！」

(くそ、こんな……！一度ならず何度も醜態を晒すとは……っ！)



まう。とうに心身ともに限界を迎えていた肉体は、そのまま込み上げてきた眠気には耐えられずに意識を失った。

#### 第四話 食事は精液

「う……」

うつすらと目を開けたアルフは身を起こす。

脇を舐められて潮まで吹き、さらにそのまま気絶するという醜態を晒してしまったことに、調教師に言いようのない怒りが込み上げてきた。

（気を失っていたのか……）

部屋に掛けられた掛け時計を見上げると、既に半日近く時間が経っていた。丸半日も気絶していたのかと、アルフは驚く。

「くそっ、あの男！ よくも、よくもこの私に……！！」

記憶のよみがえったアルフは、怒りのあまり拳をテーブルに叩き付ける。そこでふっと胸が視界に入り、目を見開いた。

「な、なんだこれは……！」

そっと胸に手を当てれば、確かに女性にされた時よりも少し大きくなっている。大きさからして、Cカップほどだろう。

気を失うまではなかったはずのそれに、アルフは愕然とする。幾度か現実を確かめるようにそれを揉み込むアルフだったが、確かに今朝よりもずっと胸は大きくなっている。

（あの男に、何かされたのか……いや、……ナノマシンの効果か……？）

侵食すればするほどに、女の快感に溺れていく。精液でしか栄養を補給出来なくなる。

初日にされた説明を思い出し、今までにない危機感を持った。

(早く、なんとかしてでもここから脱出せねば……)

最悪、男に戻らずとも、手遅れになる前に逃げ出す方法を見つけ出す方が良いのかもしれない。そこまで考えたところで扉がシュツと開き、慌ててアルフは背筋を伸ばした。

「お前は……!!」

部屋に入ってきたのは、例の調教師だ。アルフは途端に眉根を寄せ、不愉快を全面に押し出す。だが調教師は気にも留めずに一瞥した。

「貴様には例の反抗的な態度から、上からしばらくの謹慎命令が出た。三日間、この部屋で謹慎とのことだ」

「く……わかりました」

勝手に男に服従するかのような、丁寧な言葉を発した自分の口に齒噛みしたくなる。どうやら、未だに調教師の全肯定しろという命令が有効らしい。

「いい心がけだ」

腕を組んで頷く男に、アルフは心の中で悪態をついた。

(こ、この変態男がっ……)

男もアルフの内心をそれとなく察したらしく、無表情でつかつかと歩み寄り耳元で囁く。

「ん……!!」

「良いか? もう二度と逃げようだなんて、愚かな考えは持たないことだな。奴隷はここで男らに求められてこそ、存在価値があるんだ。これで懲りたなら良いんだけどなあ」  
ベッドに座ったアルフの傍らに腰を下ろし、悪意たっぷり言いながら、調教師はアル

フの太ももや首筋、ひいては脇下を指でいやらしげに撫で摩る。

「あ、は……」

支配された肉体は調教師に卑猥な意図を持って身体を撫で回されても、ゆったりと男に身を委ねていた。太ももの部分を人差し指でなぞられているとくすぐったさと、形容しがたい快感が込み上げてくる。

(や、やめろ……触るな……)

言葉でも態度でも楯突くことの出来ない己が、狂おしい。

アルフの反応を目で楽しんだ男は、笑みを浮かべて立ち上がった。踵を返したかと思うと、扉の外に置いていた何かを取ってまたアルフの元へと帰ってくる。

「謹慎用の食事を用意した。有難く受け取れ」

「あ、ありがとうございます。……っ!？」

渋々調教師に差し出された盆を受け取ったアルフだったが、それに乗った物を見てゾツとした。初日の普通の食事とは違って普通の食事ではなく食料ですらなく、人間のペニスを模した悪趣味な形のデイルドが盆いっぱいに乗せられている。

初日に説明された男の精液でしか栄養を補給出来なくなるという言葉を、形を伴って実感させられて、アルフは青くなる。こんなものを受け取るのかと冷や汗をかくも、体はそれを勝手に受け取って傍らのテーブルへと置いていた。

(このままでは、男に戻っても本当におかしくなってしまう……!)

調教師が部屋を出ていくのを見届け、張り詰めさせていた神経の糸が切れたアルフはたまらずベッドに腰を下ろした。

「く……」

傍らに設置されたテーブルに盆を置き、その上のディルドを見つめる。数えると、実に九本ものディルドが乗せられていた。一日三食分で九本ということだろう。

(馬鹿にして……こんなふざけた代物で食事をしろと言うのか？ する訳が無いだろう……しかし三日の謹慎と言っていたな、あの変態は。かえって好都合だ……逃走経路を確保する猶予が生まれたな)

アルフはベッドに横になりながら、そつと頭の中で脱出のための計画を練り始めた。

(問題はそう、カードキーだ。あれさえ奪えれば道は開ける……)

武装している相手から、何としても武器を奪いたい。

拳銃を腰に提げている兵士もちらほらと見る。一人で歩いているところを、不意打ちで襲えば奪えそうな隙だらけの兵士もいた。あくまで非力な捕虜などに、武器を奪われないという自信があるのだろうか。

(だが問題はこの肉体だ。あの状況で変態男に歯が立たなかった。それどころか不意を突いたというのに逆に返り討ちにまでされてしまった……くそつ、本当に酷い辱めを受けた！ あの時のことを考えるのはやめるか……)

ふとそこで、アルフは自分がディルドを睨みつけていることに気がついた。

(何だ……空腹、なのか……?)

思えば最後に昼食を取ってから、何も口にしていない。空腹感を感じていると言うのに、腹が鳴らないのが不思議だった。

「うっ……」

デイルドを見てみると、どうしてだかそれにむしゃぶりつきたい気分になる。それどころか考えたくもない場所——股の間の秘孔が、きゅんと甘い期待を芽生えさせていた。

（な、何が……？）

食事のことなどつい先ほどまでは忘れていた。しかし肉体はデイルドを見るなり、忘れてかかっていた空腹を思い出す。アルフは調教師の言葉を思い出し、さーっと血の気が引いた。

デイルドの中には、たつぷりと精液が詰まっている。

……自分の体は、性的欲求と精液を欲しているのではないのか。

半身を起こしたアルフは、脚を蹴ってデイルドから距離を取った。

（本当に、男のあれでしか栄養を摂れない身体になり始めているのか……？ じよ、冗談じゃない……！！）

とても直視しがたい現実には死にたいほどの屈辱を覚えると同時に、そんなふうに変えられていく自分の肉体に、強い恐怖を覚えた。

（早く、何としてでも出来るだけ早くこの監獄を抜け出さなければ……）

とはいえアルフは自然と唾を飲み込んでおり、その極太のデイルドから視線が外せなかった。

（な、何を考えているんだ、？ 私は……ダメだ、いくら今は少女とはいえ、元は男だ。何より、私のプライドが許さない……）

頭に過りかけたその選択肢を、アルフは慌てて取り消す。何より男の矜持とロタール連邦への誓いが、デイルドを使用することを許さなかった。

「うっ、く……！」

何とかデイルドから感じる魅力を振り払い、ひたすら欲望を我慢した。デイルドに惹かれていたということも死にたいほどの恥だと言うのに、生まれた欲求はみるみるうちに膨れていく。

「……耐えろ、私は男だ……っ。あんなものが無くとも、普通の食事で生きていける……！」

だがその視線は依然としてデイルドに向けられたままだ。どうしても、ペニス型のそれから目が離せない。

（やめろ、見るな……見たらだめだっ……こんな浅ましい感情を持つなんて、屈辱だ……！）

必死でデイルドから目線を外そうとするも、満たされない身体が苦しみ心臓が激しく脈動する。

「うっ、くううっ！」

常人ならばとうに屈服していた状況でも、それでもアルフは尋常ならざる忍耐力で長い時間を耐えていた。

だが切り抜けようと踏ん張るアルフの足搔きを、身体に纏ったスーツは敏感に感じ取る。

「う、ああああっ!？」

スーツは最悪のタイミングで、再び動き始める。

「何でこんな時……! あっ、ふ……!」

説明こそされていなかったが、ナノマシンと同じくこのスーツもどんな国も敵わないほど、高い技術を有するアウライ帝国が開発した最新のスーツだった。抵抗する元男の少女を屈させることに完全特化しており、常にその時に最適な責めを施すとんでもないものだ。

「やめろっ……やめろやめろっ、ああうう……っ！」

さすさすさす、とスーツは直にアルフの肌を撫でる。

いい様に翻弄されていた先日とは違い、そう簡単には屈しまいと粘る。二度目ということもあり、ある程度耐性が付いていた。だが一度覚えさせられた快感というものは、そう簡単には肉体は忘れてはくれない。何よりもあの調教師に指で腔内とクリトリスを弄ばれて幾度もイカされたことにより、開発も浸蝕もより確実に進んでいた。

アナルからクリトリス、敏感な入口にかけてをびたりと隙間なく張り付いてきたスーツが揺れる。

「あふうううっ……!! く、は、あううっ」

スーツが無理に入ってこないことで腔内への責め苦は免れたが、一度目より格段に感度が上がったクリトリスを、うごめくスーツに巻き込まれて引き絞られるだけで目を見開いてしまう。くにくにくに、と押し込まれつつ弾かれ、悩ましい声がきつく閉じる唇から押し出される。

「ふーっ、んふうう……」

スーツは鋭敏にアルフの性感帯を責め込むだけでなく、股座と乳首の周辺だけでなく身体全体を揺すった。その中には両脇の下も含まれており、以前の調教師のことを想起させてくる。

「ひいいいっ！ううっ！」

それでも涙目になりながらも、唇を引き結んで快楽に耐える。

しばらく耐え続けていたところでやっと、スーツの振動がピタリと止む。身体を強ばらせて耐えていたアルフは、たまらず力を抜いてベッドに体を沈ませた。

（お、終わった……のか……）

そつと体を見下ろすが、スーツは動く素振りを見せない。

（耐えた、た、耐えきった……！）

深深と息を吐き出す。前回のようにスーツでイカされるといふ、屈辱的な絶頂だけは何とか回避した。それだけでもこのスーツに勝ったのだと、アルフは笑みを浮かべた。まだ己にも抵抗手段があると、自信がついた気がした。

（っ……）

しかし。

逆に耐えきってしまったことで、中途半端に高ぶらされて放置された身体が悲鳴をあげる。

「か、身体の熱が引かない……」

発散されなかった分反対に解放されたいと、熱を伴って疼く。

しとどに愛液が溢れ、肉体は性的な考えに思考を囚われてしまう。

（あ、腹の奥が震えて……っ！）

ズクズクと、腹の奥が燃えるように熱い。股座またぐらはもう目を向けずとも、愛液でぐしょぐしょになっている。決して快楽に蕩けているのではなく、物足りなさまたぐらと苦しさまたぐらに肉棒を求

めて濡れ果てていた。

食欲的な飢餓感が、性的なものへと変わっている。確かに自分の体が作り変えられていると意識させられながらも、強すぎるこの渴きには太刀打ちできない。

一蹴しようとするも、無視しようとするればするほどに余計に疼きは酷くなるばかりだ。

「欲しい……」

ディルドを凝視していたアルフは、無意識のうちに呟いた言葉にハツとした。

（私は今、一体何を口走って……！）

そんなはずはないと、何度も顔を左右に

「わ、私は男だ……！ 忘れるな、今は少女だろうと……」

尋常ならざる忍耐力で、常人ならば折れてもおかしくないような飢えを懸命に抑制する。しかし一度渴きを覚え始めたアルフは、知らず知らずの内にディルドを握ろうとしてしま

う。  
（わ、私は何を考えているのだ……っ！ こんな、馬鹿げた考えは……それこそ、敵の思うつぼだぞ……）

欲望と理性がせめぎ合い、幾度となく葛藤する。

「んんんっ！ ん、ふう……ふ、ふっ……」

じゅくり、と満たされない蜜壺がまたもどかしさのあまり蜜液を多量に吹きこぼしていった。

「はっつ、はっつ、はふっ……」

疼く膣内に、ディルドをねじ込んで思い切り善がりたい。膣内での快感を一度でも覚え

てしまった身体は、引き返せないところまで来ていた。

「くっ、うううっ……!!」

(嫌だ、たえ、耐えろ……っ)

せめてディルドを挿入するよりはマシだと、恥を忍んでアルフはぐしよぐしよになった自分の股間に指を這わせる。何度か秘裂を指でなぞったが、しかしスーツ越しということもあり、微弱な快感は得られるが思うような満足の行くものは手に入らない。薄くも強靱なスーツが、指先を弾いて拒んでしまう。

「ひっ、いああ……!! あひんっ……!!」

(足りない、こんなものでは……!! 熱い、熱くて気が狂いそうだ……)

クリトリスに爪を立てても、スーツが絶妙に邪魔をしてしまう。そうなるとやはり、ディルドにまた意識を向けてしまう。

(だめだ、あれは……あれだけは……手を出したくない……あんなものを、挿れるくらいならっ……)

しかし徐々に欲望は成長していき、理性よりも大きく膨れ上がった瞬間手を伸ばしていった。

「あっ、ふ……!!」

(あ、だめ……だめだというのに……!! 腹奥が焼けつくように……熱くて辛くて、溶けてしまいそうだっ……)

だが限界まで追い寄せられた肉体は、とても理性通りには動けない。ついに肉体の疼きに耐えかね、勝手に自分の手はその極太のディルドを握っていた。

「あ……あっ……！」

(ほ、欲しくないのに……求めたら、だめ、だと言うのにつ……)

デイルドを挿んだアルフは、ゆるゆると自分の濡れそぼり変色した股座へと持っていく。  
「うっ、あはあ……！」

ぴとりと股の間にあてがうだけで、悔しくとも期待と快感で腰が砕けそうになる。

するとデイルドの感触を認識したスーツは、勝手に性器周りがよく見えるような形ではっきりと開く。ぼたぼたと露わになった割れ目から抑えきれなくなった愛液が滴った。

「んっ、ふ……」

デイルドの先端を秘部に沈めれば、快感が波紋状に広がった。

それまでずっと渴き続けてぽっかりと胸の真ん中に空いていた穴が埋まるような、深い安心感を覚えた。それでもまだ、満ち足りるまでには足りない。

「ふっ、くうう……あはあ……！」

ズブズブと濡れた腔内に、太ましいデイルドを挿入していく。苦悩に満ちていた顔を、瞬く間に喜色が侵食した。

「あっ、はああっ！は、んううっ……！」

目を見開いたアルフは、想像を絶する快感に大声を上げた。弓なりにしなった身体がガクガクと震え、デイルドを飲み込んでいく。

焦らされ熱くなった腔内を、デイルドがかき分けるだけで、絶頂し掛けるほどの快感が体を這い上がる。夢中になってアルフは股を揺らしてさらに腰を下げていった。

「す、すごいっ……あああっ……！……！と、止まらない……！はふっ、うううっ！」

こんな快感、知りたくも無かった。求めたくもなかったと言うのに、身体は凄絶な快楽からなる幸福を得てしまう。うっとり頬を緩ませ、腔内の快楽を追い求めるその姿は雌そのものだ。それでもまだ満足感には程遠い。しとどに濡れる肉壺は、疼きっぱなしのままだ。

「はーっ、は……あうううっ！」

情けないことだと分かっているのに、どうしてだかディルドを上下に動かす手が止められない。無我夢中で腰を振りたくりながら、ズチュズチュとディルドを腔内から出し入れしてしまう。

(気持ち良い……こんなの、気持ち良過ぎるっ……！)

腔壁全体が性感帯になっており、そこをディルドが擦るだけで意識が眩むほどの快感が突き抜けた。それだけでも軽く達し、ギュウウツと腔内が締まる。

「はああ……ああんっ！」

さらにディルドの膨らんだカリ首の部分に、腔内の浅瀬をゴリゴリと削られるだけで意識が霞むほどの快感が訪れる。

「はああんっ！ あああっ、はふうううっ」

もう快感に溺れたくはないと心は叫んでいるものの、身体はあまりに快楽に素直で自分から腔内を痙攣させてよりディルドと、内壁を擦ろうとする。

「んんっ！」

コツコツと、行き止まりのようなところにディルドの先端が当たる。快楽を拾いながらも、むず痒い心地を覚えた。

(あ、ここはっ……)

膣内の最奥地に何かがあるか分からないほど、アルフも性的に疎くはない。ぐるりと入口を円を描くようにディルドで突き回せば、腰が蕩けそうになった。

(う、あっ……)

子宮が出来ていることに正真正銘自分の肉体が強くショックを受ける反面、身体は底なしの悦楽を得ている。中毒性のある快感が込み上げて、ディルドを無我夢中で動かした。流石に子宮に入るほどにディルドは大きくはなかったが、子宮口をディルドで小突き回すのも心地よく、何度も動かすだけで、意識が弾け飛ぶほどの快感がアルフを包み込む。淫蜜に溢れトロトロの内壁をディルドが擦るだけで、病みつきになるほどの快感が脳裏に押し寄せた。

「はふっ、ああああ……!!！」

アルフが絶頂した途端に、体内に埋め込まれていたディルドもドクンと波打つ。何事かとアルフが悟る前に、ディルドは内包されていた多量の精液を彼の膣内にぶちまけていた。「ひいんんっ!？」

食事用と説明されただけあって、粘度のある濃厚な白濁が、濃密に最奥地に向けて注ぎ込まれる。波打つディルドに射精された途端、アルフは生まれてこの方感じたことの無いほどの満ち足りた感覚を覚えていた。

(あ、凄い……お、奥に注がれてっ……)



子宮近くにたっぷりと精液を注入されて、快感の波が全く引いてはくれない。精液を中に注入されて、ようやくアルフは充足感を得ていた。

「んんーっ……！ はあ、は……あはあ……」

目を強く引き絞ってゾクゾクと続く長い快感を必死に耐えようとするが、想像を絶するほどの快感にしばらく震えが止まらなかった。

「はー……っ……はーっ……こ、こんなに気持ちの良いものだとは……」

ようやく上半身を起こしたアルフは、顔を真っ赤に染めながらもゆるゆると真横を向いた。——まだ、未使用のデイルドが八本テーブルの上に乗せられている。

気付けばごくり、と生唾を嚥下していた。

（何をしているんだ、私は……しかしっ……）

慌ててデイルドから視線を背けたが、すぐに意識も目線もそれに吸い寄せられる。

（あ……）

一度あんなものを知ってしまったえば、もう耐えられる訳がなかった。一度は満たされたもののすぐに飢え始めた子宮が、ズクズクと再び激しく疼く。

心の奥底ではやめるとまともな精神が叫んでいたが、それ以上に快悦を欲する感情が、まともな理性を食いつぶしていく。

これ以上溺れるのは敵の策中であると思いつつも、もう一本のデイルドを掴んでいた。

「はああ……あっ、ビクビクしてっ……凄いつ……」

二度目の挿入は、一度目よりもずっと心地良く甘やかなものだった。

「は、ふううっ、んっ、ふっ……」

幸い部屋には監視カメラも仕掛けられていない。誰も見ていないはずだとアルフは欲望を解放する。

自分が囚われの身であることも堕ちてはいけな、ということも忘れてデイルドに溺れた。

何より食事をとっておらず肉体が飢えていたことも、アルフにその快感の虜にさせることに一役買っていた。

「あつ、は……んはっ、あああつ……ひあんっ！！」

解れた肉襷を、固く太いデイルドがズリズリと捲り上げる。

(こんなの知ったら……我慢出来ない……！)

目をとろんと蕩かせながら、夢中になって快感を心と肉体で味わった。

「は、はっ……うううっ！イ、イくう……っ！！」

汗だくになりながら、ベッドの上で背中を仰け反らせて深く果てる。腔内に挿入していたデイルドを抜いたアルフは、くったりと力尽きたかのようにベッドに倒れ込む。傍らには使用済みの空になったデイルドが、何本も転がっていた。

「あ、はあああ……」

それをぼんやりとした表情で見やりながら、身体を跳ねさせる。結局アルフは、支給されたデイルドを九本全て使い切ってしまった。あの空腹もきれいさっぱり消えており、残されたのは虚無感と陶酔感だけだ。

## 第五話 ご主人様へのご奉仕

謹慎の開けたアルフは、自分の部屋で青くなっていた。首まで青ざめた顔で、胸を見る。胸は両手に収まりきれない程に成長が進んでおり、足元も完全に大きな胸に隠されてしまっていた。

おそろおそろ持ち上げてみる。重量のある巨乳は、柔らかな感触を返してきた。

「これならご主人様にも満足して貰える……っいや、何を考えているのよ……私は!？」  
そこまで考えたところで、自分の思考にゾツとした。

以前ならば憎くて仕方がなかった調教師に、今では奉仕したいという気持ちさえ芽生えている。それどころか、口調も変化している。アルフは自分の口元に手をやった。

「し、すっかりしろ……私はアルフだ、アウライ帝国の忠実な下僕——断じて違うわ、ッ違う……」

ナノマシンの侵蝕は、着実に進み続けている。調教師はこの場にいないにも関わらず、女性口調になりかけている自分に絶望した。

またいくら栄養補給のためとはいえ、デイルドを使い切る必要は無い。補給のためではなく、快樂を得ることに没頭していた自分を想起して狼狽する。

(じよ、冗談ではない……このまま堕ちてたまるか……堕ちたくない……!)

アルフは弱音を吐きそうになる心を叱咤して、気を持ち直す。

あの時、調教師に命じられた、全肯定しろという言葉の効果はまだ続いている可能性

がある。だが、あの調教師さえ居なければ逃げる隙は伺えるだろう。

（今は脱出することだけを考えろ……性別が戻る方法はこの際もう諦めるしかない、せめて……）

これでも未だ心は兵士としての心を失ってはいない。いくらあられもない姿を見せてしまったとはいえ、忠誠を誓いたくは無い。屈辱的な目に遭わされても、アルフは脱走計画を必死で模索していた。

（全てはロタール連邦のために……）

だがアウライ帝国にマイナスな意見を持つところ、何故かその考えがふつと吹き消されてしまう。それどころか、アウライ人に対して一度たりとも覚えたことの無かったはずの不思議な感情が生まれていた。

今朝まではなかった己の感情、アルフは困惑する。

（なんだ、この感情は……）

思い出すだけで、期待で腰が震えそうになる。

明らかにあのデイルドを使ってから、精神そのものに変化が生じていた。胸がどんどんと膨れているのも、その一環だろう。

「ぐ……」

沸き起こる焦燥感も、どこかふわふわとした多幸感に打ち消されていく。

脱出の手段を考えなければ、アウライ帝国を憎悪しなければ。そういつたことを考えようとした途端に、心がざわついてそれ以上の何かが自我を押し流してしまう。思考することを阻害されている。その異常性を自覚出来るだけの理性はまだあったが、どうしてか行

動に移そうとする気力が湧いてこなかった。

(何故だ……)

どれほど精神では抗おうと、身体は正直な反応を見せてしまう。崩れそうになる理性を叱咤し、心を奮い立たせて懸命にアルフは抵抗する。

それでもナノマシンの汚染は、じわじわと精神にまで染み込んでくる。

「くそ……」

こうやって葛藤している間にも、刻一刻と時間は過ぎて行く。結局せつかくの貴重な時間だと言うのに、アルフは何も出来ずに部屋の中で燻っていた。

「よう、来てやったぞ」

「なっ……」

乱暴に扉が開けられ、入ってきたのはあの調教師だった。

調教師は無表情でたち入ってくるが、アルフの胸を見るなり

「へえ……随分とでっかくなつたじゃねえか」

「んっ！ あ、ふぁ……」

ズカズカと歩み寄ってきた調教師は、そのままアルフの巨乳を揉みしだいた。

「くっ、ふうう……！！」

大きな男の両手でも、成長したEカップの豊乳は溢れてしまう。むにゆうつと手のひらの中で形を変えながら、親指で乳首を陥没させてきた。

「んぁあっ！」

「まだ触っただけだろ。雌の声上げやがって。良い感じに感度も上がってきたみたいだな」

それでも未だに続く全肯定の命令が、決して抵抗の意思を持たせてはくれない。目の前の人間に従うべきだと、脳が認識していた。

(まずい、今のこの浸蝕度でこの男と接触するのは……)

男に触れられるアルフは危ぶもうとするも、敵視しようとしたところでやはり意識がかき乱される。それでも心に喝を入れ、強く危機意識を持ち直した。

「んんっ……」

それでもやはり、鼻につくような甘い声を出すのは留められない。

「良い反応だ、来い。調教の続きをしてやるよ」

調教師のその言葉に、膣内を疼かせてしまう自分が恨めしい。

アルフが連れていかれたのはやはりあの調教部屋で、そのままベッドに寝かされるのかと思ったが、今日は何もかもが違った。

「今日はお前が俺に奉仕してみせろ」

「はっ……」

誰がそんなことを、とアルフは心内で調教師に唾を吐く。

(あれ……?)

しかし次の瞬間に調教師の目の前に腰を下ろしていたアルフは、調教師の股座またぐらに手を這わせていた。

(な、私は何をしてっ……！)

手は調教師を満足させようと、その剛直を扱っていた。

ビクビクと震えるペニスを小さく嫌悪感を抱くが、扱く手が止まらない。

(うっ、か、身体が…勝手に…)

決してマリオネットターで命令された訳では無い。強要されてもいないというのに、アルフは自分から男の肉棒に奉仕していた。

そもそも前まではキスをするだけでも吐き気を催していたと言うのに、ほとんど嫌悪感もなくなっていた。

やがてアルフの手の中で、調教師の雄竿が硬く育っていく。血管を浮き上がらせて勃起するペニスを、アルフは両手で覆い込んだ。

「悪くないな」

亀頭から玉袋まで、隅々を余さずに手のひらと指を使って刺激する。カリ首の隙間まで指を滑らせて、ゆっくりと上下に擦った。

さらに出てきた先走りを指で掬いながら、それを表面に塗り込んでよりスムーズにペニスを扱っていく。自分でも見えて目に毒だった。

止めようと言う意思が、微塵も湧いてこない。今の自分は拙い手遣いではあったが、懸命に男のペニスを気持ちよくさせようとしていた。

身体がこの男に、ひいてはアウライ人の男に屈服するべきなのだという認識が、事実として定着しかけている。

(まずい、これは非常にまずい……傾向、なのにつ……)

思考は思うように働かず、ただ調教師の顔色を伺うように今度は上目遣いでチロチロと先端を舌で嬲り始める。

苦くてしょっぱい味が口いっぱい広がる。

(身体が動かない……それどころか、悦んでいる……！)

本心では肉棒を吐き出したかったが、身体は肉棒の味を完全に楽しんでいる。

単なるフェラでは無く、丁寧に味わうようにじっくりと口内のペニスを舐め回す。歯を立てないようにペニス全体を舐め、唇をふるわせて亀頭を舌でグリグリとえぐる本格的なものだ。

いくら奉仕しろと言われたとして、これほど積極的に動かされてしまうものなのだろうか。

(さ、流石にこんなのおかしい……こんな自分から……！)

奉仕をしながらも戸惑うアルフの思考を見透かした調教師は、肩をそびやかして笑った。「自分で自分が分からないという様子だな。どうして自分からこんなに積極的に従っているのかって？ 俺は優しいからな。種明かしをしてやるよ。マリオネッターっていうのは、受けた命令を言葉通りにする訳じゃねえ。ナノマシンの浸蝕が進んでいけば、拡大解釈するようになっていく。現に今のお前のでかい乳がその証拠だな」

「な……」

「例えば『受け入れろ』という命令は『俺を悦ばせろ』に、『全肯定』は『我々に忠誠を誓う』と脳が次第に命令を改変させて行って、享受したわけだ。もう戻れないようなあ」  
 (そんな……もう戻れない？ あの命令をされた時から、逃げ場はなかったというのか……)

…!?)

女として奉仕し、男を悦ばせるメスに堕ちてしまった自分の姿をただ見せられている。発狂しそうな光景と事実を突きつけられて絶望するアルフだったが、どうしてだか同じくらい嬉しくて仕方がない。

(くそ、そんな……こんなことが……っ！最初から逃げられなかったなんて……！私は一生このままどころか、アウライ帝国で一生……！)

しかし感傷が絶望に囚われている間も、残酷にも自分の体は調教師のペニスを美味しそうに舐めしゃぶる。笑みさえうかべて。

ラストスパートをかけるように、強く表面を口内で舐めながら、膨れ上がった陰茎の尿道口に優しく舌を突き立てた。

「ぐっ、イクぞ」

絶頂が近いことを感じ取り、アルフの口は動きを激しくする。自分の体ながら、ゾツとアルフは青ざめた。

(や、やめろ……吐き出すな、私の口も動くんじゃない……!)

口に射精される生理的な嫌悪というよりは、浸蝕が進むことへの懸念があった。溺れるほどに濃く大量の精液が、口内に吐き出された。

「んむううっ！」

アルフは顔をしかめることなく、むしろ有り難そうにそれを舌で味わって飲み下す。

(苦い……)

一度出したばかりにも関わらず、調教師のペニスはすぐに屹立していく。それを見たア

ルフは今度は自分の爆乳に、調教師に手渡されたローションを掛ける。そうしてぬめらせ  
た巨乳の谷間を開き、調教師のペニスをそこへと沈ませていった。

感触以外の主導権を無くした肉体は、まるで自分の体では無いようだ。

たふたぷと横乳を持ち上げ、ギョツとさらに強くペニスに押し付ける。マシユマロのよ  
うに柔らかな巨乳に挟まれていることで、強まる締め付けは快楽のみを生み出した。

ペニスの反応を見ながら、身体も左右に揺らしていかにかにペニスを、気持ちよくするかと  
いう行動を肉体は取っていく。意識しなくともそれが当たり前の事なのだ、肉体は墮ち  
ていた。後はもう、肉体と糸の繋がった心が引きずられて墮ちていくだけだ。

「んっ、く……ふう……」

いやいやと言いながらも、身体は従順で正直だった。

「良いな、その調子だ」

調教師がそう言えば、さらに身体は熱烈に動いてしまう。溢れ出てきた先走りを潤滑剤  
代わりに、ペニスを擦っていく。揺さぶりながらも、時折谷間でサンドしたペニスをぐい  
ぐいと押し込む。

誰かに教えられずとも、男を愉しませるやり方で奉仕していた。やがて調教師の肉棒が  
震え始め、絶頂が近いことを伝えてくる。アルフは体全体を動かして谷間を泡立てながら、  
ちゅぷちゅぷと肉棒を強めにふわふわの爆乳で扱いて締めた。

「んんううっ！」

瞬間、胸でサンドしていた調教師のペニスが吐精する。顔にまでかかった白濁を、アル  
フは嬉しそうに舐めとった。



体は盛大に善がる。

「ああ。そうだ、これがチンポの味だ。よーく覚えろ」

「はいっ、すごく気持ち良いれすっ……！！！」

透明な愛液が滴るほど溢れて、体は肉棒を歓喜していることを示していた。

(何も、考えられなくなっていく……)

ナノマシンの侵攻は着実に進んでいる。アルフはひっと喉を鳴らすが、反射的に快悦に染まった声を上げてしまう。

(必ずこの研究所を脱出して……上に報告を……っ！！な、何とか……して……脱出……？ 逃げる必要が、あるというの……っ違う、逃げないと……？)

このままでは本当に後戻り出来なくなる。

どうにかして逃げ出さなければと本能が警鐘を鳴らすが、ほとんど浸蝕された脳は陥落することを望んでいた。相反する感情がせめぎ合っている間にも、着々とアルフは調教師に文字通り仕込まれていってしまう。

「何を考えているんだ？ こっちに集中しろ」

「ひゃい……っ！ ごめんなしゃっ、あふううう……！！」

なおも調教師は止まらない。どれほど酷くされようと、仕込まれた肉穴はおぞましいほどの快感を生み出していた。

「んんううっ！？」

「お、そろそろ降りてきたか」

そこでゴツ、と調教師のペニスの先端がアルフの最奥地に当たる。

経験したことの無い不思議な感触に、アルフは瞠目した。

「あ、あああっ!？」

調教師の肉棒はアルフの子宮へと辿り着いていた。子宮も何度も絶頂を迎えさせられたことにより降りてきており、ゴチュンツと愛液の飛沫を上げて子宮口と先端が当たる感触にアルフは息を飲む。

「んっ、ふああ……!! ひゃああっ!？ あひっ、や、なんですかこれっ! お腹の一番奥がビリビリしてえっ……! 頭の中が掻き回されてるみたいですっ」

「ここが子宮だ。雌にしかないメスのための器官だ。初めてにしてはなかなかだな。やはり才能があるみたいだなあ」

「うっ、んくううっ! ふううっ! そ、そこ擦られると腰溶けちゃいそうですっ!」

閉じきってはいるが扉のようなものが構えているそこを、執拗に調教師はなぞる。

初めはむず痒い感覚であったが、すぐに揺さぶられているうちに喜悦へと変化していく。本能は絶対に子宮にまで立ち入らせてはならないと警告する一方で、心は快感を待ち望んでいた。ナノマシンの信号を受ける脳が、理性を食いつぶしていく。

「ひあああんっ! やひいっ、はううううっ!」

閉まった子宮口に龟头をぴったりと当て、こじ開けようと小刻みに振動させられるだけでも、歯の根が合わなく噛みなるほどの衝撃だった。

ぐにぐにと子宮口を形を確かめるが如く先端になぞられ、アルフは首を振って悶える。

「ひああっ! らめえっ……気持ち良すぎておかしくなっちゃいますからあ……!!」

思わず悲鳴が口をついて出るが、拒絶の言葉ではなく快楽を肯定するものだった。

屈辱をかすかに覚えたが、それももう消えかけたプライドの副産物でしかない。アルフは多幸福感に腰を揺らした。

「駄目じゃねえだろう。本当はもっと責めて欲しいんだろ？自分でも分かるだろう？奥も嬉しそうに締め付けてくるのがな」

「あつ、ひいん……っはい、ごめんなさいいっ」

言葉こそ従順だが屈していないアルフの心に、調教師は加虐心を疼かせながらねっとりと言ひ聞かせていく。

「そうだろう？好きなんだろうこれが。もつとして欲しそうに強請<sup>ゆす</sup>つてきやがって。本心でも思っているんじゃないのか？」

抵抗の句が告げないアルフに、調教師はここぞとばかりに畳み掛ける。

「本当はもっと激しくして欲しいんだろう？身も心もメスに堕ちたいんだろう」

「んっ、ひうう……」

（だ、駄目だ耐えろ……しっかりしろ、惑わされるな……！ここで負ける訳には、気持ち良い……っ耐え切れ、ひ、気持ち良いっ……！）

ついに拒絶の言葉ばかりを叫んでいた心の中にまで、その快楽が浸蝕してくる。子宮にまで肉棒が到達し、雌の快感が完全に花咲いたということもあり、ナノマシンの浸蝕が進んでいた。

（あ、凄い……身体がふわふわ浮いているみたいで……ち、違うっ……やめろ、やだあつ……）

子宮を開くような動きをされるだけで、脳が焼ききれるほどの快感と痺れが直撃する。

悦びを表すように男の肉棒を締め上げた。



「気持ちよさそうな顔だな」

「きつ、気持ち良いです……！ おまんこのおくつ、ゴリゴリされるのおつ……！」

感じていることを隠すことなく、自分から正直に発してしまう。己の体は勝手に自ら調教師を喜ばせようと卑猥な言葉を吐いていた。

「へえ、こうされるのが良いのか」

「くひいいいいっ！」

マーキングするかのようになり、子宮口に押し当てられた亀頭が再び振動を掛けてくる。入口を揺さぶられるだけでも目眩がする快感だった。

（やだっ、やだああ……！！ 奥破れちゃうっ、そんなに早く突かないでえええええっ！！ いやっ、もうイきたくない、そんなのいらぬからああっ……負けたくないっ……！）

今まで自分という者を形作っていた自我が、口調が、心と体の乖離した性別によって、精神そのものがあやふやになっていく。子宮での凄絶な雌悦とナノマシンの浸蝕に板挟みにされ、アルフは狂わされていく。

「こんな調子だと、子宮の中に入ったらどうなっちゃうんだろなあ……？ なあ、どうなると思う？」

「あひ……っ！」

「ぶっ飛ぶくらいに気持ちよくなれるぞ？ 今感じているものなんかよりもずっとな。知つちまえばもう中毒になるくらいになあ」

「うあ、それは……」

（もっと気持ちよくなれる……？ ご、ご主人様のモノでっ……）

震わせてくるだけでなく調教師に子宮口を硬い亀頭で殴打されながらまた膣内を責められ、たまらない雌としての快感に悲鳴をあげて感じのたうつ。

「あはううううっ！うあっ、ひゃひいんっっ！」

子宮周りの膣壁を肉棒に突き回されるだけで、中イキした結合部が愛液を吹く。

「あはああっ!?!」

(本当に子宮に、入ってこようとしてっ……!)

それでも調教師の腰使いは止まらず、いつそう激しくなる。

「あやあああっ!! ひゃああああんっ！」

(あっ、うそ……!! いやあああっ!! やめてっ、動かないでえっ!!)

ずっとイカされ続け、アルフは黒目を上向かせる。

「あああっ! あんっ、ひあんっ! ひいんっ、ひああっ!?!」

(いつ、なんでっ、あっ、やだ:っ! もっ、もうイきたくにやい、イきたくないからあっ!

そんな風にされたら、おかひくなっひゃううう:っ! あっ、やだ、だめえええっ! あ

あああっ! :っうう、耐えないと、耐えないとお:っ!)

初めは固く締まっていた子宮口だったが、アルフがいく度に少しずつ緩まっっていく。徐々に徐々に、その口を開き始めていた。

(うああ:入ってきちゃう、来ないでええっ……!!)

身体では受け入れるしかないとしても、心では拒み跳ね除けなければ。涙目のアルフは半分墮ちながらも、尚理性の崖に張り付いていた。何一つ意味を持たない

(いや、やだ:!! 心ごとアウライ帝国の奴隷になって支配されるなんて:!! 私には、帰

る場所があるんだから……！でも、なんで受け入れたらダメなの……？こんなに気持ちが良いことなのに、むしろご主人様を満足させられるんだから。歓迎すべきことじゃないの……)

微かに残った理性が、お前の使命を思い出せと叫ぶ。

(逃げなくても良い……この身体はご主人様のためにあるんだから、それ以外何も欲しくないわ……！)

完全に肉体は病みつきになっており、時間をかけてナノマシンに染め上げられてきた心も陥落寸前だ

(ち、違うつ……！私は何を考えて……！あああ、ロタールに……ロタール連邦に帰らないと……！)

しかしその健気で必死のアルフの守りも、調教師のペニスが子宮に沈み始めた途端に全て吹き飛んだ。

「はうあああつ！あつ……は、挿入ってくる……！！！」

「そろそろ行けそうだな」

子宮口を開かれるというのは、身も心も奥底まで支配されていくようだ。完全に男に掌握されてしまっているというのに、そのこと自体に肉体は悦び愛液を吹く。

きゆうきゆうと開かれたばかりの子宮も、男のペニスを悦びながら締め付けていた。少しでも調教師が腰を後退させれば、濡れうごめく媚肉こびにくが離したくないとペニスを熱烈に締め付けてくる。ペニスに開発された蜜壺は、すっかりと陰茎に対する従順性を身につけてしまっていた。

(ああ、堕ちていつてる……もう、ロタールなんでどうでも良い……)

膣内での快感を得る度に脳の中もすっかりとナノマシンに蝕まれていき、悦びだけでなく楽しささえ見出していた。

もっと酷くもっと激しくして欲しい、と抱いてはならない期待まで持ち始める。

(だってご主人様に全部奪われていくのが、こんなにも気持ち良いんだから……これさえあれば、何もいらぬや……)

そうしてペニスの先端が、ついに子宮口から顔を出す。

「あつ、はあああああつっ!!」

「ふう、すごい締めつけだな」

瞬間、激しくアルフは叫びながら膣口から潮を吹いていた。

(ああ、凄いつ……気持ち良すぎるよお……! もう一生、このままで良い……っ!)

子宮口に入られた刹那、とうとうアルフは自分が調教師に敗北したことを悟った。ほんの僅かに残っていた理性が、最終警告を出したきり快感に流されていく。

開かれたばかりだと言うのに、子宮で得られる雌としての快楽は凄まじいものだった。こんな心地の善いものを一度味合わされて仕舞えば、我慢など出来るはずもない。

雌の快楽を求めて腰を振り、調教師の鬼畜な責めに喜ぶ。

自分からペニスを強く強く締め付けた。

「んううううっ!!」

「またイったのか。もういきまくりだな、089。そんなに子宮に入られたのが嬉しかったのか」

「ひんんっ……！うれっ、嬉しいですっ……！私の子宮もご主人様に支配されたいですっ」

「言われなくてもしてやるよ……本番はここからだからな」

調教師はアルフが潮吹きしている最中にも関わらず、ドチュンッ！と達したことで収縮し、閉じかけたアルフの子宮をまた開く。

「ひんっ、ひうあああっ！！ああっ！また」

子宮内も開発されていき、とてつもない快悦に舌を突き出して喘いだ。体だけでなく、精神までもがおかしくなってしまうそうだった。子宮と浅瀬を肉棒に擦られる度に、奥が焼けるように熱くなって幾度も絶頂してしまう。

「もうすっかり味も覚えたみたいだなあ」

「はいっ」

体だけでなく精神も凄絶な快楽に追い寄せられ、逃げ場を完全に封じられる。

子宮口や腔内全体がチュプチュプと切なげに締まり、ペニスの動きに追いつがった。

アルフは調教師の肉棒に嬌声をあげ、突き上げられるごとに、腰を激しく動かしながら淫蕩に体をくねらせる。

ピストンを繰り返されれば、女性的な流線を持った下腹部引きつったように震え、大きな乳房が律動に合わせてフルンフルンと揺れる。

ナノマシンの洗脳が急速に浸透し、アルフは体から力を抜く。本当に、浸蝕が完了しようとしていた。

忘れてはならない、なにか大切なことが頭に過ったが、子宮をゴツゴツとピストンされ

ればまた熱悦に溶かされていく。腰を肉棒の動きに合わせて振り、快楽に熱中してしまっていた。思考を置き去りにして、肉体に突き刺さり精神にさえ溶け込んでくるような快楽だった。

「そろそろいくぞ、089」

「はいっっ！！ご主人様の精液、私の雌子宮にたくさんだしてくださいっ！！」

「くっ……」

「ひんっ、うにゃああああっ！！」

アルフも子宮で精液を受け止め、これまでになく幸せな笑みを浮かべて塩を吹いた。

## 第六話 最終調整

光源の絞られた部屋で、生々しい嬌声が響く。

「んはああああっ！」

ベッドの上に座り込んだアルフは、両手で体をかき抱きながら背中をぴんと張らせて絶頂する。だらしなく蕩けた顔で甘く喘いだ。



アルフの胸は完全に爆乳の領域に入り、サイズはGカップにまで成長していた。「あつ、ふうううっ…はああんっ…!!」目をとろりとさせて、ずっしりとした豊乳を自分で掴んで揉みしだく。

手に持っているのは栄養を摂取するための特別なデイルドではなく、快楽を得るためだけに用意された自慰玩具だった。さらに食事の時のデイルドとは違って一回り大きく、アルフが調教師に頼んで用意してもらったものだ。

乳首とクリトリスにもローターが装着されており、スーツ越しとはいえ苛烈な勢いで振動している。

全身の性感帯を刺激され、善がり狂った。

「あはああつ！ はふっ、んふうううっ！ 気持ち良い…!! もつとちようだい…!!」

アルフは歪な笑みを浮かべて腰をひたすら振り、快感に溺れる。その顔に理性はもはや存在せず、そこにいるのは一匹の墮落した雌だった。

「あはっ、またイイの来てるう……っ……っ……！ イくっ、イっちやううっ！」

幸福そうな顔で、アルフは再び達する。

意識が霞むレベルの快感だが、アルフの肉体は慄くどころかまだまだ足りない<sup>おのの</sup>と快楽を無心する。

「おなかのおく、ずぼずぼされて、あたままっひろになっひやうううっ！ おっ、あっ、まら、まらイくからあああっ！！！ あっ、つよいつ、つよいつ……っ！ お腹の奥、ゴリゴリされてえ……っ！」

子宮もどこもかしこも、疼いて疼いて仕方がなかった。絶頂する度に心が満たされるがまたすぐに乾いてしまう。その飢えを潤すために再びアルフは、さらに手元のリモコンを操作し、ローターの震度を強にする。

「んうううっ！ あひいつ、しゅごいいいつ……！ んああんっ！ ブルブルしてりゅっ、イくの終わんにゃいいっ！ あひいつ、まらイくっ！ イっちやうのおっ……！ イきすぎておかひくなりゅっ……っ！」

襲ってきた凄まじい快楽にアルフはうっとりとした顔で悶え、プシャ、プシャアアッと秘部から潮を吹いた。

「気持ち良いっ、もっとそこ突いてえっ……！ ぐちゃぐちゃにしてっ、あひっ、太いのいっばい来たああっ！」

口調も女のそれへと変わり、もう男だった時の記憶も誇りも思い出せない。

「んひいいいいっ！ 気持ち良いっ、ずっとイってる！ イってるのにまたイくううっ！ なんかくるっ、くるう…っ！ 熱くてすごいのが、きちやう…っ！ あっ、くる、きた、きたっ…！！」

たとえ思い出したとして、アルフにとってはどうでも良いことだ。何より今は、自分を飼うアウライ帝国への忠誠しか無かった。

「んっ…」

不意にドアが開く。ぼんやりと顔を動かせば立っていたのは調教師で、アルフは途端に花の咲いたような笑みを浮かべた。ズルズルと全身を揺らしながら、愛液と本気汁に塗れたディルドを引き抜いていく。

「ご主人様…！！」

汗を拭うと、アルフは爆乳を弾ませて愛おしそうに調教師にハグをした。見違えるほどに従順になったアルフの姿は、かつての威厳も強さも見受けられない。ただの見目の美しい、男に従う少女だった。

「俺の見ない間に、また随分と胸もでかくなったな。俺が居なくて寂しかっただろう」

「ん…：はい、ご主人様のおかげです。ご主人様が来てくださって嬉しいです…：寂しかったです」

そろりと調教師がアルフのはち切れんばかりの胸に指を辿らせれば、彼女は腰を踊らせる。

「そろそろ次の侵攻作戦が近くてな。ロタールの深部に居た089に聞きたい。我々アウライ帝国のために『お前の知る軍事機密を全て話せ』」

「あっ……」

調教師は首輪に手を当てながら、アルフに命令をする。

下準備も仕込みも整えられ、骨の髄まで完璧に調理されたアルフはもはやアウライ帝国に食われるための料理だった。

しかし。

「……ません」

「どうしたんだ」

調教師は眉根を潜める。

「言え、ませんっ……」

「何だって？」

調教師は自分の耳を疑った。驚いてアルフの表情を仰いだが、彼女は真っ青な顔で首を振るばかりだ。

「も、申し訳ありません……ご主人様……その、本当は話したいのですが話せなくて……私でも、分からなくて」

調教師を酷く愕然とさせるものだった。アルフも忠誠を誓った調教師やアウライ帝国のためだというのに、言葉が出てこない。顔を青くしながら、必死で謝罪した。

「そのっ、も、申し訳ございません……っ」

「驚いた。確かに生意気だとは思っていたが、その強情さを侮っていたようだ」

調教は完了している。肉体も心も開発されているはずだ。身体はとつくのとうに陥落しているどころか、心さえも掌握しきつていけると言うのに、何故か最後の砦が壊せていない。

アルフの中にある無意識のリミッターが、話させまいと抗っていた。

「どうやら最後の後押しが足りないようだな。来い」

「んっ」

腕を引っ張られ、アルフは調教師に着いて行く。連行されたのは、アルフが逆らった時にも押し込まれた調教部屋だった。

「そこに横たわれ」

「は、はい……」

これから調教師による調教が始まるのかと、アルフの肉体は自然と股を濡らし始めていた。期待を覚えるアルフに、調教師は自分の調教が進んでいることを実感しながらも、何故に情報を吐かせられないのか当惑する。

「ふうっ：は、んん：」

調教師が勃起したペニスを愛液を垂らす入口に沿わせれば、アルフの顔が真っ赤に染まり腰が切なそうにカクカクと揺れる。

「行くぞ」

「はい——んひあああっ！ご主人様のっ、奥に来たああっ……！」

調教師の肉棒を受け入れた腔内は、愛おしげに盛大に収縮する。それどころかあまりの喜びに、虚ろな眼差しを浮かべたアルフの肉体は簡単に絶頂へと駆け上がった。

「おいおい、挿れただけでいったのか」

腔内のくねり様に、アルフが果てたことを悟った調教師はため息を着く。しかしこれも自分の調教の賜物だと、満足そうだった。

「はいっ、ご、ご主人様に犯して貰えるのをずっと心待ちにしてて……あううっ！ うっ、ふうっ」

奥地まで侵食されていく感覚に、アルフはうっとりとして恍惚の表情を灯す。これを求めていたのだと、全身の細胞が歓喜している。全身を焼く心地良さに、一瞬呼吸を忘れかけたアルフは震えた。

「ほら、089の大好きなチンポだぞ。よく味わえ」

「あああっ！ 凄いつ、気持ち良いですっ……もつと欲しいです、奥たくさん突いてくださいっ！」

やがて動き出した肉棒にアルフの膣内が喜びの痙攣を示し、逃がすまいと愛液を纏わせねっとり絡みついてくる。

もつと蹂躪されたい、貪られたいと目尻に涙を浮かべて自分もピストンに合わせて腰を上下させる。

「ほう。優秀な雌穴になったな、悪くない。これが良いんだろう？ 好きなだけ欲しがれ」  
「あっ、ありがとうございますご主人様っ……！ はひいつ、ご主人様のおちんぽ嬉しいですううっ！」

「最初の反抗ももう嘘のようだな。じっくり089を開発して来た甲斐があった」

アルフの子宮も、あつという間に削ぎ入ってくるそれを、受け止めるための準備をひとりで始めた。雄種おすだねを浅ましく求めてキュンキュンと戦慄おののく。

肉棒を一旦引き抜こうとすれば寂しげに、必死で食いついてくる。躡しつけられたアルフの膣内は、どうすれば男を喜ばせられるのか教えられずとも知り尽くしていた。

「こっちも奉仕のやり方をよく覚えたみたいだなあ？」

「はふああああっ！ あああっ！ 好きっ、これ好きいいっ！ ひいんっ！ おちんぽ奥まで来たああっ……！」

一度挿入されれば気持ち良さに脳を支配されて、もうそれしか考えられなくなってしまふ。それがアルフにとって生きる意味でもあった。

「これで089も立派な雌奴隷だな。誇らしいだろう？」

「ひゃいいっ！ ご主人様専用の雌穴、もつとズポズポしてくださいひゃいっ！」

そのまま調教師の並みよりも優れた肉の怒張が、アルフの子宮を容赦なく抉り抜く。

「ひんああああっ！！ おくっ、一気におくにいっ……！！ 気持ち良いですっ、強い……！！ おっ、奥ゴリゴリ凄いですうっ！」

脳みそが溶け落ちそうな快感に、アルフは絶叫する。

しかし未だにリミッターは外れない。懸命にひび割れた錠前を引き絞って歯向かってくる。調教師は顔をゆがめて楽しげに笑った。

「はげしっ、激しいですううっ！ ひあっ、来る……！！ すぐイっちゃいますっ……！！ ひゃひいいっ！」

子宮を暴虐される喜びに、アルフは嬉しげに身体をくねらせて達する。子宮も感情を体現するように、男根を絶妙な濡れ具合と強さで包み込んだ。

根元から締め付ける感触を楽しみながら、そのまま調教師は腰を振る。

「んふうううっ！！ ふふうううっ！ おひっ、ひうううっ！」

「いいか？ その体も心もアウライ帝国……いや、俺のものだ。089は俺のために生き

るんだ」

「はいい……っ！！ ひゃひゅっ！ あああっ！ わっ、私はご主人様のものですっ、この心もご主人様に捧げておりますっ！」

狂いそうなまでの快絶が、腹奥からせり上がってくる。今はそれが途方もなく気持ち良く、腔襞ちゅうひだが熱烈に打ち震えた。

「ふっ……イクぞ、喜んで受け取れ」

「あああっ！ キてるっ……んあああああっ！」

低く呻いた調教師は、アルフの子宮内にたっぷりと濃い白濁を放水する。うねる子宮もなみなみと精液を注がれて、満悦する。これでもかと女としての悦びに埋められ、アルフは大量の潮を吹いた。

「あ、あ……あはっ、ああ……」

「どうだ。話してくれる気にはなったか？」

首輪はアルフのナノマシンに確かに反応している。アルフに命令を拒絶出来るだけの思考力は残されていない。

（何で言えないの……？）

それでも、尚もアルフは首を横に振った。

「も、申し訳ございません……」

「まだ言えないのか」

「ひうう……っはい、そうですっ……」

ごめんなさい、すみませんと善がりながらか細い声で謝るアルフの常軌を逸した反抗に、

もはや調教師は感心の吐息を漏らす。沢山のローターの軍人を少女に変え、雌に落としてきたがここまで頑なな人間はいなかった。

「この状況でまだ抗うのか。とんでもねえ忍耐力だな」

アルフですら無自覚なまでの強靱な心は落とせていない。

それを悟った調教師も、思わず肩をすくめるほどの粘り強さだった。

肉体をアウライ帝国の手玉に取られ、さらには思考の大半を奪われたところで、最後の抵抗としてアルフの心は本人でさえ気付けない、強固なバリエードを築いたのだ。今まで調教師が墮としてきたどんな相手よりも手強いアルフに、逆に男は嗜虐心を最高にそそられて笑う。その心が気高ければ気高いほどに、陥落させた時の心地良さは別格だ。

「まあ良い……」

しぶといアルフの心は、一度も誰にも本気を見せたことの無い調教師に火をつけた。

「ここまで手こずらせた人間は、089。お前が初めてだ」

調教師は目を眇すがめめると、アルフの腰を両手で掴む。

「ひゃ、ううっ……!!」

一旦肉棒を引き抜いた調教師は、アルフを壁際に立たせて後ろを向かせる。

「んんううっ！」

立ちバツクの状態で、また調教師はアルフにペニスを突き立てた。だがそれまであれだけ激しかった猛攻が嘘のように、その腰使いは緩やかだ。

「ふっ、あ……あっ、はあ……ご、ご主人様っ……」

幾度も暴いたことによりアルフの腔内の弱点や敏感な箇所は知り尽くしている。そこを

狙いつつも調教師は、あえてそこを避けて微弱な快感を与えていった。

「は、や、やあ、あ……っ。そこ、は……っ！」

実力を惜しまずアルフをイカせ、快感で蹂躪していた先程と一転して弱々しい力で律動する。

最初は休憩させてくれているのかと思ったアルフだが、実際は全く違った。

「ふああっ、あ……っ！？よ、弱くっ……んん……！」

絶頂には辿り着かない絶妙な感覚と力加減で、調教師はアルフの腔内を摩擦する。

そんな弱い熱だけを与えられ、アルフの中でもどかしさが生まれる。達せないことで快悦が放たれずに蓄積していき、焦れつたくなってきた。

絶頂にはあと少しで届かないという物足りない疼きに、アルフの太ももが震える。

(で、でもご主人様からイカせるという命令は、出ていないわ……)

しかし全肯定という命令はされたが、自分から懇願するような類の指示は受けていない。(あ、ふう……身体が熱い……)

イカせて欲しいかと調教師の方からは決して提案せず、ひたすらアルフを快感で炙る。

命令だけでなくあくまで自分からもメスだということを、自覚させてじっくりと陥落させていく魂胆だった。

じつとりと肉体を燻らせていく。アルフにとっては、今更手加減されても辛いだけだ。そうなれば肉体とともに、心も追い詰められていく。腹部は余りの熱さに蕩けてしまいうだった。

(ど、どうしてご主人様はこんなことをするのかしら……)

何故、調教師がこんなことをするのか戸惑ったアルフだが、きつと意味のある行為なのだろう。そう判断し、切なさや物足りなさを感じながらも生殺しの快感に耐える。

「は、ひゃううっ……!?!」

すると律動が強くなり、アルフは腰を振って快感を得ようと悶えた。

(ん、あ……来ちゃうっ……!?!)

あともう少しで達せられる。

しかしそう身構えた瞬間、明白に狙ったようなタイミングでその責めが止められてしまう。アルフたたまたまらず目で訴えるも、調教師は邪よこしまな笑みを浮かべるだけで何も言わない。

「あつ、は……はふっ、ふう……うう……!」

いきかけたところでピストンが減速し、中途半端にまた焦らされて目尻に溜まった涙が決壊する。

絶頂することが出来れば、きつと凄まじい多幸福感を味わうことが出来るだろう。

「んふうっ、うっ、ふううう……」

(何か言いたいことがあるなら教えろって、ご主人様から命令されていないから……が、我慢しないと……!)

だがアルフでさえ潜り込んだことのない、心の深層意識が叫んでいた。

イかせて欲しい——自分からそう言っただけとはいけない。話せば全てが終わるだろうと。

しかしそれは同時にそのたった一言を言えば、ロタールの情報をアウライ帝国に漏らせることも意味していた。それは自分でも望む事柄だ。

(今更ロタール連邦を裏切っても、なんの損も無いのに……)

だというのに何故その一言が言えないのか、アルフは自分自身に今までにない程に失望していた。

アウライ帝国に服従を誓った身で、今や敵国でしかない元祖国を裏切ることになろうと、その何が駄目だというのか。なのに何故か、懸命に完全服従することを頑なに拒んでい

る自分がいる。その抵抗がどんなに無意味なのか、己自身が一番理解しているのに。その理由を探る前にまたしても絶頂寸止めの熱を与えられて嬌声を漏らす。子宮内にも熱が堆積していつて、ズクズクと疼きがうねっていた。

「ああああ……っ！」

腔内だけでなく、いたずらに調教師の指がクリトリスを掠める。指先で優しく触られて揉まれ、黒目が裏返りそうになった。身体全体が煮詰められているように熱く、結合部はドロドロでその上から際限なく愛液が溢れてくる。

（も、もう……耐えられないっ……ご主人様にお願したい……！！）

身も心も屈服した今、本能の防衛に過ぎない。その時アルフの頭に掠めたのは、ロタール帝国に入った際に掛けられた誰かの言葉だ。しかしそれももう遠い記憶、直ぐにぼやけて消えてしまう。

（もうどうでも良い……私はご主人様のものなんだから……！！）

アルフはついに、自分の手で最後の壁を破壊する。

心も体も調教師に今度こそ根負けし、アルフは自ら調教師に懇願した。

「お、お願いしますご主人様……私のおまんこ、めちゃくちやにしてくださいっ！！」

「

「言えたじゃねえか、089」

笑みを深めた調教師は、そのまま一息に浅瀬から子宮の奥までペニスを突き挿した。

「ああああああっ！！」

アルフも濁りきった目を細め、満面の笑みを浮かべて潮を吹き上げた。今までの中で一番深く心地の良い絶頂に、気を失いかける。



「まだへばるんじゃないやねえぞ、これからが肝心なんだからな」

「ふあああんっ！うああああっ！ああああっ！」

中を加虐されるのは辛抱ならないほどの開放感で、休みなく肉棒に抉られる膣内は喜びくねっていた。雄の味を記憶し、子宮を荒々しく突き上げられる度に愛液が飛び散った。

調教師は逞しい剛直を抜き差しし、強大な質量を叩き込む。幾度も落雷のように脳天を快楽が直撃し、アルフはつま先を丸めて善がり叫ぶ。

「はっ、ひゃあああああんっ！んひいつ！奥っ、おくも暑くて溶けちゃうっ！子宮も蕩けちゃいますっ！！」

「言う気になったか？」

「はいいつ！東支部の左右には二つの塔があり、右の塔の地下に武器庫がありますっ！！ふああああっ！！」

「は、ははははっ！そうだ、その調子だ！！全ての情報を俺に教えるんだ」

調教師の肉棒に膣内を余さずみっちり埋められ、擦られてアルフは何度も連続で果て続ける。とうとう極秘情報を話してしまったことに対する、罪悪感は一切なかった。あるのはたまらない多幸感だけで、アルフの全てを飲み込み染めていく。

「ひゃいいつ！もっ、森の奥には監視塔がありますっ！！あはああっ！イイっ！」

引き下がった肉棒がまた子宮を突くごとに、彼女の体は絶頂していた。

「監視塔か、道理であるの辺りにやけに木々が生い茂っていたのか」

「ひぐうううっ！吹くっつ、イクうううっ！お潮っ、潮吹いちゃいますううううっ！！」

「好きなだけ吹けば良い。言えば言うほど可愛がつてやるからなあ」  
いき過ぎたアルフの肉体は、今度は潮を吹きまくる。  
調教師の笑いを聞きながら、アルフは嬌声をあげてまたイキ潮を吹いていた。

## エピソード

「報告します。先程、ロタール連邦の東支部が壊滅したとのことです。それと、こちらを」  
「なるほど……よろしい。下がれ」

部下の報告を聞き終えた調教師は、悦に浸りながら椅子の上で組んだ足を入れ替える。また手渡された詳細な紙面にも、視線を滑らせて頷いた。

「笑いが止まらなくなるくらい、順調だ。このまま行けば、東部戦線の陥落も時間の問題だな」

「はい。指示は全体的確でした。連邦の各地で混乱を招いているようです」

「悪くないな。捕虜は全員捕らえて調教施設送りにしろ。一人も逃がすな……貴重な労働力だからな」

「了解しました」

調教師は手を振って部下を下がらせる。

アルフを墮としてロタール軍を壊滅させる有力な情報を得たことにより、調教師である男も昇進し少佐となり、この前線司令室で指揮をとれるほどに出世していた。

喉の奥で笑いを零しながら、かかとを鳴らす。

「この調子でロタールの奴らを調教し、一人残らず服従させていけば、連邦どころかいずれこの帝国そのものを支配することも夢ではないな」

ふんぞり返りながらも、その横顔は野心に満ちている。元より調教師になったのも、連

邦のためではなく自分の欲望を満たすことが理由だった。上層部に忠義を尽くす意思はさっぱり無いが、この国に逆らう気も無い：今のところは。

「この世のどんな殺戮兵器も、女体化ナノマシンには敵わないだろう。我ながら素晴らしいものを開発した：あの力さえあれば、どんなに屈強な人間でもたちまち手駒に成り下がる。スパイにも活用出来るだろうな。幸い今はどこも圧倒的な人不足だ。その点ナノマシンの技術は、無限に労働力を生み出すことの出来る最強の兵器だ」

男はつらつらと野心を語る。決して独り言ではなく、男の視線は傍らにずっと立たせてたアルフに向けられていた。

「流石です：ご主人様のお考えは、本当に素晴らしいものです。私も一生、ご主人様について行きますね」

肩肘を付いて横目で見下ろす調教師は、アルフの返答に満悦げに笑った。

「当たり前だろう？ 特等席で、俺が国を掌握する光景を見ているが良い」

「はい、勿論です。ご主人様♡」

調教師の高笑いが部屋に響く。

アルフも長い白髪を揺らして大きな胸に手を当て、紫の瞳をうっとり細めた。















